AICHI-NAGOYA

"Heart" of JAPAN
-Technology & Tradition

時を旅する 愛知の街道

飯田街道

美濃路

東海道

あいちの歴史観光推進協議会

発行　あいちの歴史観光推進協議会

あいちの歴史観光

目次

03 街道旅に出かける前に
05 なるほど街道用語集

07 **愛知の東海道**
09 二川宿
10 吉田宿
11 御油宿～赤坂宿
12 読み物「四つの東海道」
13 間の宿 本宿
14 藤川宿
15 岡崎宿
16 池鯉鮒宿
17 読み物「鎌倉街道の面影」
19 間の宿 有松
20 鳴海宿
21 熱田宿
22 読み物「城下町名古屋をめぐる街道」

25 **愛知の美濃路**
26 名古屋宿
27 清須宿～稲葉宿
29 稲葉宿～萩原宿～起宿

31 **愛知の飯田街道**
32 東桜～杁中
33 八事～平針、足助
35 読み物「足助の塩」
36 稲武
37 伊勢神峠、夏焼
38 読み物「尾張・三河の塩の道」

39 愛知の街道資料館を訪ねる
41 愛知県全域地図

街道旅への誘い

時を旅する。歴史を歩く。

遠くへ出かけるだけが旅ではない。
この小冊子がご提案するのは、時を越える旅。
数百年という時間を自分の足で踏みしめる行為もまた
身軽でぜいたくな新しい旅のかたち。
たとえばそこが見なれたいつもの道であっても
ちょっとした想像力をプラスすれば
昔の旅人たちが歩いた面影をたどることもできる。
まずは歩きやすい靴を用意して
身近にある旧街道へ出かけよう。
弥次さん喜多さんならずとも
そこには多くの発見が待っているはずだから。

東海道有松の町並み（名古屋市）

街道旅に出かける前に ガイドブックの使い方

ガイドブックの構成

・本ガイドブックは、江戸時代から明治時代を中心とした愛知県の歴史的な街道を対象としたガイドブックです。歴史的な学術書ではありません。

・東海道、美濃路のページは、江戸から京・大坂に向かう東から西の順に紹介していますが飯田街道のページは名古屋から三河に向かう西から東の順に紹介しています。

・街道の紹介およびウォーキングコースは、紙面の都合上、起点から終点までの全ルートではなく地域限定エリアの紹介としています。

・ウォーキングマップの旧街道は、旧街道と想定される道や、街道史跡を絡めながら周辺観光施設を含めたコースを設定しています。

街道旅のお願い、注意事項

・街道は生活道路や幹線道路の抜け道になっている場合が多く、歩道のない場所もあります。ウォーキング時は道路周辺の居住者への配慮ならびにクルマや自転車の走行に注意し、自身の身を守るルールとマナーを行った上で、お楽しみください。

・コースによってはトイレや商業店舗のない場所もありますので、事前の準備などをお願いいたします。

・記載した施設や社寺などは、今後も感染症拡大などの影響によりやむなく休館や来訪に制限が出る場合もあります。事前の確認および自身の健康状態や感染症対策を講じたうえでご来訪をお願いいたします。

凡例

1 時間・距離

コース全体の歩行時間と距離。歩行時間は1時間3.6㎞で計算しました。歩調は個人差があるので、あくまでも目安としてください。各ポイント、施設の見学時間は含んでいません。なお、高低差により時間差があります。

4 問い合わせ先

問い合わせ先の電話番号・住所、ガイドボランティア情報を紹介しています。 ㊟記載の問い合わせ先は、あくまで地域の観光に関する問い合わせ先であり、街道に関する学術的な質問や史実等の問い合わせには対応しかねる場合があります。

3 ウォーキングマップ

ウォーキングコースのマップを掲載。詳しくは隣ページをご参照ください。

2 祭りと名産品

地域の祭り、催事、土産情報を紹介しています。

◆街道の名称についておことわり

江戸幕府の定めた五街道やその付属街道など官道以外の地方の脇街道にはいろいろな名前が付けられ、名称は複数存在しました。昔の道の名前の付け方は、その行き先や目的地の地名を冠する場合が多かったのです。A地点とB地点を結ぶ道は、AからBに向かう人とってはB街道であり、BからAに向かう人にとってはA街道でした。

明治9年（1876）、明治新政府は新たな道路制度を定め、全国の道を国道・県道・里道の3等級に分類しました。これを受け、それまで様々な名称で呼ばれていた江戸時代の街道名を整理して新たに名称が付けられました。現在も通用している街道名は、この時のものであり、江戸の名称とは異なる場合があります。また明治から今日までの時代変化の中で経路の廃止や付け替え、また起点・終点も異なる場合もあります。

街道名は、地域や時代によってさまざまであり、わかりづらいためこのガイドブックは、巻末の参考図書にある街道名を参考にしながら時代を統一せず、江戸と明治の街道名を混在して使用しています。

＜ ウォーキングマップの使い方 ＞

最寄り駅
紫文字で表記。

街道名
ピンク文字で表記。

ウォーキングポイント
コース中の紹介ポイントを数字と紫文字で表記。

方位とスケール

ウォーキングマップ 凡例

- 旧街道と想定される道（実際より太く表示）
- 他ページ掲載の、旧街道と想定される道（実際より太く表示）
- 旧街道と想定される道の消滅箇所、不明箇所
- 旧街道時代の河川の渡しルート（想定）
- ウォーキングコース
- 最寄り駅からウォーキングポイントまでのルート
- 国道
- 高速道路・有料道路
- トイレ
- 駅
- バス停
- 松並木
- 寺
- 神社
- 学校
- 公園
- 市役所
- 警察署
- 工場

＊マップを見やすくするために、一部の町名や河川名の記載を省略している場合があります。

街道旅がもっと楽しくなる、なるほど街道用語集。

街道旅に出かけた際、ふと出会う江戸の旅用語の数々。出かける前に知っておくとちょっと便利（＊概ね、愛知に関わる用語を中心に五十音順に記載）。

間の宿【あいのしゅく】

宿場間の距離が長い場合や峠道などの難路である場合、正規の宿場と宿場の間に設けられた休憩用の宿（自然発生的に成立した場合もある）。本陣や旅籠はなく宿泊はできなかった。有松（名古屋市）、本宿（岡崎市）は、間の宿。

有松の町（名古屋市）

一里塚【いちりづか】

街道の両側に一里（約4㎞）ごとに塚を設け、その塚の上に目印として樹木を植えたもの。一里山ともいう。織田信長、豊臣秀吉のころから築かれたが、制度として確立されたのは、慶長9年（1604）、徳川家康が二代将軍秀忠に命じて、江戸日本橋を起点として主要街道に築かせてから。

冨田一里塚（一宮市）

追分【おいわけ】

街道が左右に分岐するところで、各地で地名として残っている。茶屋が置かれている場合が多く、休憩所として利用された。

東海道・吉良道追分（岡崎市）

御茶壺道中【おちゃつぼどうちゅう】

毎年旧暦の4月から6月にかけて江戸と京の宇治を往復し、幕府御用の茶を運んだ一行のこと。基本は東海道を利用したが茶を詰めた復路は、湿気を嫌い東海道の海路を避けて、美濃路や本坂道を通った。幕府御用の御茶壺道中は他のすべてに優先されたため、宿場の人々や街道沿いの人々は負担を強いられたという。「茶壺に追われてトッピンシャン、抜けたらドンドコショ」の童歌で有名。

街道・海道【かいどう】

交通往来の多い主要な道。海道や道中、往還などと表された。このうち海道は、もともとは海沿いの道を意味する。鎌倉時代の東海道は、「京・鎌倉往還」とも、「海道」とも呼ばれていた。その後時代は不明ながら、主要幹線道を海沿いになくても「海道」と呼ぶこともあった。

曲尺手、曲尺之手【かねて、かねのて】

宿場の出入り口、または宿場内の道筋を、鍵型に曲げた道筋のこと。桝形ともいう。当初は、敵の進行を妨げる意味合いがあったが、後には宿場内で大名行列が鉢合せしないように視界を遮る役目となった。互いの行列を見えないうちに曲尺手の先で確認し、もし鉢合わせる場合、格下大名家は近くの寺などで待ち、通過時期を外した。

鳴海宿の曲尺之手（名古屋市）

鎌倉街道【かまくらかいどう】

鎌倉時代、東海道も含めて、諸国から鎌倉に至る道のこと（P17・18参照）。

高札場・札ノ辻【こうさつば、ふだのつじ】

高札とは幕府や諸藩が決めた法度や掟書、禁令、罪人の人相などを木の板札に掲示した立て札のこと。この高札を、人目を引くように交通量の多い宿場の辻や市場に高く掲げておく場所。札ノ辻ともいう。

二川宿の高札場（豊橋市）

五街道【ごかいどう】

江戸・日本橋を起点に放射線上に設定された江戸幕府の五つの主要幹線道。東海道、中山道、奥州道中（街道）、日光道中（街道）、甲州道中（街道）。

参勤交代【さんきんこうたい】

江戸時代、諸国の大名は幕府から江戸に屋敷を与えられ、妻子はそこに暮らし、江戸を離れることはできなかった。一方、大名たちは江戸と国元（領地）を原則、一年交代で往復していた。江戸に赴き将軍に拝謁することを参勤、国元に帰ることを交代といい、合わせて参勤交代と呼ばれた。三代将軍徳川家光の時に制度化された。本来は平時における軍役奉仕のため、出府し将軍家を守ることが目的であったが、泰平の世にあっては大名たちの権威と格式を示す機会になった。またこの制度により街道や宿場など交通インフラの整備や各地へ文化の伝播をもたらすことになった。

三州【さんしゅう】

三河国のこと。

三州馬稼ぎ【さんしゅううまかせぎ】

信州の馬稼ぎ＝「中馬」に対抗して荷を運び街道を往来した三河の馬稼ぎのこと。江戸時代後期、信州と三河の馬稼ぎの間で争いが起き、文政3年（1820）幕府が仲裁に入り、三河側の馬の頭数や馬稼ぎに参加できる村を制限した。

塩の道【しおのみち】

沿岸部でとれた塩を内陸部に運んだ道のこと。中部地方では信州の塩尻を終点とし、尾張・三河から信州に至った飯田街道、伊那街道などのこと。なお、尾張・三河から運ばれた塩を「南塩」と呼び、日本海から千国街道を南下して運ばれた塩を「北塩」と呼んだ（P38参照）。

七里の渡し【しちりのわたし】

東海道熱田宿（宮宿）から次の桑名宿までは海路七里の船旅であった。所要時間は約4時間といわれたが、潮の干潮や天候によりコースも異なり、時間も距離も一定ではなく時には休船を余儀なくされることもあった。また利用者側も船酔いや、排尿の心配もあった。そのため、迂回路として美濃路や佐屋路（佐屋宿から桑名宿まで木曽川を下る三里の渡し）が利用された。

宮の渡し公園（名古屋市）

常夜灯・燈【じょうやとう】

宿場内や寺社境内を照らすため、あるいは遠方からの目印として夜間に火を灯した灯籠。街道には宿内安全、町内安全などと彫られた一般的なものと、火伏の神を祀った秋葉山へ参詣するために街道沿いや、人々が火伏の神への信仰や地域の安全を願って建てた秋葉山常夜燈がある。

宿・宿場【しゅく・しゅくば】

街道の要衝にある集落。旅人の宿泊・休息のための宿屋・茶屋や、荷物を運ぶための人足や馬を集めた町場。宿駅ともいう。宿場の最も重要な役割は、隣の宿場から運ばれてきた幕府の公用の荷物や通信物を、次の宿場まで運ぶ継ぎ送り業務であった。そのため宿場は、本陣、脇本陣、旅籠などの宿泊施設だけでなく、継ぎ送りを行う問屋場が中心となった。宿場は、交通量が増大するにつれ、しだいに町としての様相、機能を整えていった。

信州【しんしゅう】

信濃国のこと。

助郷【すけごう】

幕府は各宿場に一定数の人馬を常備する義務付けをした。しかし、街道の交通量が増大すると、宿場に準備されている人馬だけでは足りず、近隣の村々から人馬を提供させることになった。その制度のこと。

立場【たてば】

宿場の出入り口や宿場と宿場の間にあって旅人や人足、駕籠かきなどが休息した場所。もともと杖を立てて休息したのでその名が起こった。中には「立場茶屋」という土地の名物を出す茶屋も存在した。

中馬【ちゅうま】

江戸時代、信州の伊那（奈）谷の農民たちが農閑期に馬や牛の背に載せ運搬した荷物運送業者（馬方）たち。さらにその馬や牛のこと。当初は自家の農産物を町の市などに運び商いを行い、帰路に海産物を持ち帰ったが次第に商人の荷を扱っていった。後に信州全般に広がり中部山岳地帯と太平洋岸地域を結ぶ重要な物資輸送の担い手となった。「賃馬（ちんば）」、「中継馬（ちゅうけいば）」が語源といわれる。厳密には信州の人々を指す。

付け通し【つけとおし】

幕府や諸藩の官道における物資輸送は、荷物や馬が宿場間をリレー式に継ぎ送られる制度だったが、官道を避けた中馬による輸送は、直接目的地に輸送する形態がとられた。付け通し、あるいは通しと呼ばれた。

伝馬【てんま】

幕府の公用を行うために宿場で馬を乗り継ぐ、その馬のこと。伝馬制自体は、古代から行われていた。慶長6年（1601）、徳川家康は今川、武田、北条らの戦国大名や豊臣秀吉の伝馬制を発展させ、江戸と京を結ぶ東海道の宿場に伝馬定と伝馬朱印状を発した（宿場ごとに馬36疋を置くこと、隣の宿場までの馬継ぎに責任を負うこと。東海道の各宿場には馬は36疋を備えさせたが、寛永15年（1638）以降は100疋の伝馬を置くことが義務付けられた）。

問屋場【といやば】

参勤交代の大名家や、幕府の公用の旅人たちが宿場を利用する際、馬の手配や次の宿場まで荷物の継ぎ送りをする人馬の継立（つぎたて）業務と、同じく幕府公用の書状や品物を次の宿場に送る継飛脚（つぎひきゃく）の業務を行った宿場の中核的施設。

道中奉行【どうちゅうぶぎょう】

江戸時代、五街道とその付属街道（五街道に付属する重要街道。愛知県では美濃路、佐屋路、本坂道）における宿場の伝馬、宿屋、飛脚の取締りや道路、橋梁など、道中一切のことを管轄した江戸幕府の役職。多くの場合、大名を監察した大目付が兼帯した。

土場【どば】

江戸時代は川を利用した舟運が盛んであった。荷物を積み下ろす荷揚げ場、船着き場のこと。

並木【なみき】

旅人の道中を快適にするため、夏の日差しを避け、冬の冷風を遮るため街道の両側に杉や松が植樹され並木となった。近代から現代にかけて多くが姿を消しているが新たに植樹されている地域もある。愛知県内では御油（豊川市）、藤川（岡崎市）、安城市、知立市では往時を伝える松並木の景観を見ることができる。

知立松並木（知立市）

旅籠【はたご】

宿場における庶民が宿泊する食事付きの施設。1泊2食付きが基本。旅籠には客の相手をする飯盛女が置かれている場合が多かった。また食事が出ずに自炊する旅人専用の宿を木賃宿と呼んだ。木賃とは薪代金のこと。

豊川市大橋屋（旧旅籠鯉屋）（豊川市）

馬頭観音像【ばとうかんのんぞう】

中馬が行きかった街道の路傍各所に見られる石像。馬頭観音は、馬の頭の形の宝冠を頂いた三面六臂（さんめんろっぴ 顔が三つ、腕が六本）または三面八臂（さんめんはっぴ 顔が三つ、腕が八本）の目尻を吊り上げた忿怒（ふんぬ）の表情をもつ（三面ではなく単独のものもある）。「馬頭」の名称から馬の守護神として信仰された。道中の安全や荷を運び力尽きた馬の冥福を祈った。

足助町新町の馬頭観音（豊田市）

尾州【びしゅう】

尾張国のこと。

姫街道【ひめかいどう】

一般には本坂道（御油から本坂峠を越えて浜松などで東海道に合流）の別称。厳重な新居の関（静岡県）を避けるため、あるいは浜名湖を横断する今切の渡しの海路の危険を避けるため、縁起をかついで〝今切〟という言葉を避けた婦女子の往来が多かった東海道のバイパス。七里の渡しを避けた佐屋路や駿河街道のうち平針から岡崎までの道にもこの別称がある。

姫街道（本坂道）道標（豊橋市）

棒鼻【ぼうはな】

宿場のはずれ、境界（出入口）に立つ棒の杭のこと。見附ともいう。歌川広重「東海道五十三次〈保永堂版〉」の藤川宿の画にも棒鼻が描かれ、岡崎市の旧藤川宿に復元されている。

歌川広重「東海道五拾三次内 藤川 棒鼻ノ図」/資料提供:静岡市東海道広重美術館

本陣【ほんじん】

公家や大名、幕府の役人が旅の途中、宿泊・休息する施設。街道に面して広い間口を持ち、表門、玄関、書院が設けられた。一般の旅人の宿泊は認められない一方で貴人の宿としての格式を保つため、維持管理に多くの費用がかかり本陣の経営は厳しかった。豊橋市の二川宿本陣は、旧東海道の宿場では2か所しか現存しない建物。

二川宿本陣（豊橋市）

桝形【ますがた】

曲尺手、曲尺之手と同じ。

見附【みつけ】

棒鼻と同じ。

尹良親王【ゆきよししんのう】

室町時代初期、南北朝の争乱期の南朝方の皇族。後醍醐天皇の孫。劣勢挽回のため、天皇によって遠江（静岡県西部）に使わされた宗良親王が父とされ、尹良親王も各地を転戦したといわれる。飯田街道沿いの足助、稲武地域や別所街道の豊根、さらに南信州にかけてゆかりの遺跡や伝説が点在する。

尹良親王の腰掛石（豊田市武節町）

脇往還、脇街道【わきおうかん、わきかいどう】

幕府の道中奉行が管理した五街道とその付属街道を除く、地方の街道のこと。街道が通る地域の諸藩が管理・運営し、幕府では勘定奉行が間接的に関与した。

脇本陣【わきほんじん】

本陣の補助的な宿舎で副本陣にあたる。本陣の宿泊客が多い時に利用された。本陣が平屋建てを原則とするのに対し、脇本陣は二階建ての場合が多かった。

《愛知の東海道》

東海道は、江戸と京・大坂を結ぶ交通の要路として、
参勤交代の大名や多くの旅人たちが往来を重ねた道。
東西と結ばれた愛知の東海道とその宿場町は、
にぎやかだった頃の歴史文化を今に伝えながら時を刻む。
松並木や一里塚、本陣や旅籠など往時の面影を訪ねれば
眼前の風景の向こうに江戸の旅模様が浮かび上がる。
さあ、東海道へ。

池鯉鮒宿／知立神社参道（知立市）

岡崎宿／八丁蔵通り（岡崎市）

吉田宿／吉田城鉄櫓（豊橋市）

二川宿／豊橋市二川宿本陣資料館（豊橋市）

御油宿／御油のマツ並木（豊川市）

熱田宿（宮宿）／宮の渡し公園（名古屋市）

鳴海宿／瑞泉寺（名古屋市）

藤川宿／東棒鼻（岡崎市）

赤坂宿／豊川市大橋屋（旧旅籠鯉屋）（豊川市）

▼ 池鯉鮒 首夏馬市

▼ 赤坂 旅舎招婦ノ図

▼ 二川 猿ヶ馬場

▼ 鳴海 名物有松絞

▼ 藤川 棒鼻ノ図

▼ 吉田 豊川橋

▼ 宮 熱田神事

▼ 岡崎 矢矧之橋

▼ 御油 旅人留女

歌川広重「東海道五拾三次内」（保永堂版）
／資料提供：静岡市東海道広重美術館

現存する本陣が、江戸の旅を伝える

二川宿

二川宿は、江戸日本橋から数えて33番目の宿場町。当初は二川村と大岩村の二村で一宿分の役をはたしていたが、交通量の増大による不都合から移転し一続きの町となった。現在でも江戸時代の町割りがほぼ残る中、東海道で2か所しか現存しない本陣（大名や公家など貴人の宿舎）、庶民の宿であった旅籠、さらに宿村役人の店舗兼住居（商家）が公開されている。また住民・行政・大学の協働により一般の住居や店舗も歴史的な町並みに調和するよう工夫がなされ、切妻平入の軒が並ぶ宿場町らしい景観が見られる。

①松尾芭蕉の「阿ちさゐや　藪を小庭の　別座敷」が刻まれた紫陽花塚がある。⑥聖観音像は、街道の風物詩として道中記などにも取り上げられた。

調和のとれた町並みに宿場町風情を味わう

豊橋市

JR二川駅から豊鉄バスに乗車し二川東町バス停で下車。南に100m歩くと東海道。東海道を西へ進み旧二川宿に向かう、芭蕉句碑のある妙泉寺、商家「駒屋」、本陣と旅籠屋「清明屋」、さらに本陣資料館で江戸の旅模様を学ぶ。町並み散策の後は旅人たちも眺めた観音像の立つ岩屋山へ足をのばしてみよう。

②二川宿で商家を営むかたわら、問屋役や名主を務めた田村家の遺構。主屋、離れ座敷、土蔵などが一般公開。　③二川宿本陣と旅籠屋「清明屋」が見学できる。東海道、宿場、本陣について学べる。　④境内には寛延4年（1751）の灯籠や秋葉山常夜燈がある。　⑤田原街道との分岐として明治33年（1900）に建てられた。

地域とふれあう！四季カレンダー

夏　**灯籠で飾ろう二川宿**（7月下旬）
3,500基の灯籠が旧街道沿いを照らし、幻想的な雰囲気に。

秋　**二川宿本陣まつり大名行列**（11月）
江戸時代の街道風俗絵巻を繰り広げる大名行列が行われる。

二川八幡神社例祭（10月）
豊橋市でもっとも歴史があるといわれる山車が出る。

information（P9･10共通）
問 豊橋観光コンベンション協会
☎0532-54-1484
所 豊橋市花田町字石塚42-1

【豊橋観光ボランティアガイドの会】
☎0532-54-1484
※要予約・無料
実費（交通費・食事代・入場料等）負担

豊鉄バス 二川東町 → 徒歩5分 → ①妙泉寺 → 徒歩3分 → ②商家「駒屋」 → 徒歩8分 → ③豊橋市二川宿本陣資料館（二川宿本陣、旅籠屋「清明屋」、資料館） → 徒歩10分 → ④大岩神明宮 → 徒歩17分 → ⑤渥美郡奥郡道標 → 徒歩17分 → ⑥岩屋観音 → 徒歩5分 → 豊鉄バス 岩屋観音

所要時間 約1時間5分
距離 約3.5km

城下町、湊町としてもにぎわった宿場町

吉田宿

吉田宿は、江戸日本橋から数えて34番目の宿場町で現在の豊橋市中心部と重なる。吉田の町は古くは今橋と呼ばれ、東三河の拠点として戦国時代の争乱の最中に吉田に改称された。江戸時代は、吉田藩の城下町、東海道の宿場町、さらに豊川の舟運や伊勢詣での船旅の湊町としてもにぎわった。東海道は吉田城の惣構えの堀に沿って道筋が通され町屋が立ち並んだ。明治2年（1869）、吉田は豊橋に改称。戦災や戦後復興のため宿場町や城下町の景観は失われたが町名や拡幅された道筋に街道の名残が残されている。

①元は文化2年（1805）に建てられた秋葉山常夜燈。平成13年（2001）復元。②吉田城の東惣門跡を伝えるミニチュアが再現されている。③曲尺手とは鍵型に曲げた道のこと。東海道に交差した道を屈曲させ城側に門があった。

街中で宿場町、城下町の面影をたどる

豊橋市

豊橋駅前から路面電車に乗り東八町電停で下車。歩道橋を西へ渡る。東海道は吉田城の東惣門跡レプリカを右手に南へ進み、すぐに右へ折れ、さらに左へ折れて国道1号線と平行に西へ進む。鍛冶町、呉服町等の町名を頼りに吉田宿をしのぶ。途中、豊橋公園となっている吉田城本丸へ寄り道。再び東海道に戻り本陣跡、脇本陣跡、旧豊橋跡に向かう。

④櫓の内部は吉田城や吉田宿に関する資料を展示する。　⑤（右）吉田宿には本陣が2軒あった。（左）駐車場の片隅にひっそりと佇む脇本陣跡。

⑥西惣門跡を伝えるミニチュア。この門を出ると宿外れとなった。　⑦貞享4年（1687）、松尾芭蕉が吉田宿に泊まった際の宿の跡。　⑧江戸時代には木製の大橋（吉田大橋）が架けられていた。明治期以降に上流に新たな吉田大橋が架けられた後、豊橋（とよばし）に名称変更された。

地域とふれあう！四季カレンダー

春　**春まつり（さくら）**（3月下旬～4月上旬）
豊橋公園で開催。

夏　**祇園祭**（7月第3金・土・日曜）
手筒花火約300本を奉納する豊橋の夏の風物詩。

秋　**炎の祭典**（11月）
三河伝統の手筒花火250本が放揚され、毎年多くの見物人が訪れる。

冬　**鬼祭**（2月10･11日）
国指定重要無形民俗文化財の奇祭。

味わいたい！地元の名産品

菜めし田楽
豆腐田楽と菜めしは江戸から続く名物。

JR東海道本線 豊橋駅 → 徒歩22分 → ⑧トヨバシ遊園（旧豊橋跡） → 徒歩8分 → ⑦湊町公園・松尾芭蕉吉田の宿旅籠の記 → 徒歩7分 → ⑥西惣門跡 → 徒歩10分 → ⑤本陣跡、脇本陣跡 → 徒歩10分 → ④吉田城鉄櫓 → 徒歩14分 → ③曲尺手門石碑 → 徒歩12分 → ②東惣門跡 → 徒歩1分 → ①秋葉山常夜燈 → 徒歩2分 → 豊橋鉄道市内線 東八町駅

所要時間 約1時間26分
距離 約4.7km

四つの東海道

江戸時代、幕府の五街道第一とされた東海道は、京・大坂と江戸を結ぶ最重要幹線として整備された。9つの宿場があった愛知の旧東海道沿いでも、今なお往時のたたずまいを残した町並みや松並木、一里塚が見られる。しかし、東海道が東西交通の主要幹線になるのは江戸時代よりはるか以前からである。

◆古代　東海道はもともと海沿いの道、「うみつみち」といわれ、都の東の伊勢に向かい伊勢湾を渡り、渥美半島の伊良湖から海岸線を通って東国に至る道だった。これが最古の東海道といわれる。その後、大化の改新を経て律令制の時代になると、都のある大和を含めた畿内五カ国（五畿）とその外の諸国を七道（古代の行政地域）に分け、諸国に置かれた国府と国府をつなぐ「駅路」を通じさせた。この七道駅路のうち最重要路は大路と呼ばれた山陽道、中路は東海道と東山道、残りは小路に分けられた。東海道は、伊賀、伊勢から尾張、三河を経て常陸までの15ヶ国とされた。この駅路は広く直線路とされ各所に駅家を設けて人馬を常備させたという。

◆中世　都が平安京に移り律令制が崩れるとともに古代の駅伝制は衰退したが、源頼朝が鎌倉に幕府を開くと、鎌倉を中心とした道を整備し、中でも京と鎌倉を結んだ「鎌倉街道」（京・鎌倉往還）と呼ばれた東海道を重視した。古代東海道は近江から鈴鹿峠を越えて伊勢に入り、陸路尾張に至る「伊勢廻り」のコースがとられていたが、中世東海道は近江から美濃の不破（関ヶ原）を越え大垣、墨俣から尾張に入る「美濃廻り」のコースがとられた。

室町時代後期の戦国の争乱は、東海道の各地でルートを荒廃させ、やがて中世東海道は崩壊した。一方、各地の戦国大名はその領国において政治・軍事・商業発展のため街道の整備や伝馬制を布いた。駿河・遠江の戦国大名・今川氏はやがて尾張国境まで進出したが、その領内の東海道は今川氏が整備したとされる。徳川家康の近世東海道の誕生以前、尾張の熱田、鳴海、三河の御油、赤坂には宿場的機能があったといわれる。

◆近世　慶長5年（1600）関ヶ原の戦いに勝利した家康は、東海道諸国を勢力下に置き、翌年江戸から京までの各宿場を指定し伝馬制を布いた。ここに近世東海道の原型が整えられた。慶長9年（1604）には江戸・日本橋を起点に里塚が築かれていった。なお、家康が定めた東海道の経路は熱田から海路桑名に渡り鈴鹿峠を越える「伊勢廻り」コースである。「美濃廻り」の道＝美濃路は、名古屋城の完成とともに整備された。

大坂の陣、参勤交代制を経て交通政策を整えた江戸幕府は、東海道、中山道、日光海道、奥州海道、甲州海道の五街道と付属街道を道中奉行の管轄下におき、全国支配を強固なものにした。さらに幕府は豊臣家滅亡後、東海道大坂延伸に着手。大津宿西側の髭茶屋追分から分岐し大坂に至る街道を整備し、これも東海道として管理した。東海道は江戸日本橋から京三条大橋までの〝五十三次〟とともに、江戸日本橋から大阪・高麗橋までの〝五十七次〟も併存していた。

享保元年（1716）、幕府は五街道の正式な呼び名を統一。主要幹線道は海辺の道でなくても「海道」と呼ばれていたが、東海道を除き日光・奥州・甲州の各「海道」を各「道中」と改称した。幕府公式文書でも「海道」は「街道」に、「中仙道」は「中山道」に書き換えられていった。ただし一般への普及は広まらず、以後も海道や中仙道が使い続けられた。

◆近代　明治新政府は、近代国家にふさわしい制度への変革を推し進めた。それは宿場や街道の交通にもおよんだ。明治2年（1869）には関所、翌年には本陣・脇本陣の名目が廃止された。同じ頃には「七里の渡し」や「三里の渡し」も廃止。また「海道」は「街道」に表記を統一された。そして、新政府が重点を置いた鉄道網の整備が推進され、明治22年（1889）東海道線（新橋―神戸間）が全通した。

笠寺一里塚（名古屋市）

浮世絵や弥次喜多道中の舞台を満喫

御油宿～赤坂宿

御油宿は江戸日本橋から数えて35番目、赤坂宿は36番目の宿場町。二つの宿はともに宿泊客の多い宿場で、その距離は1.7キロと東海道の宿場間でもっとも短い。そのため双方の客引き合戦も激しく、歌川広重の浮世絵にもその様子が描かれているほど。また、その短さを松尾芭蕉は「夏の月御油より出でて赤坂や」という句に詠んでいる。二つの宿の境界には現在も約350本の松並木が約600メートルに渡って続く（国天然記念物）。赤坂宿には江戸時代の建物のまま平成27年（2015）まで営業を続けていた大橋屋（旧旅籠鯉屋）が公開されている。

③御油のマツ並木

③幕府の交通政策として植樹された、約350本の松の大木が並ぶ。

豊川市

松並木、旅籠をめぐり江戸の旅人気分

名鉄国府駅より西へ進むと東海道に突き当たる。東海道と本坂道の分岐点であった御油の追分、御油橋を渡り旧御油宿へ。高札場跡を右に折れ直進すると丁字路。東海道はこれを左折するが先に「御油の松並木資料館」に立ち寄る。東海道に戻り500mほど歩くと松並木が現れる。その先が旧赤坂宿。芭蕉句碑の関川神社、「大橋屋」の建物を訪ねよう。

①本坂道との分岐点で、常夜燈と道標がある。②御油宿の町並みの復元模型などの資料が揃う。④樹齢800年の楠の大木と、芭蕉句碑がある。

①御油の追分、秋葉山常夜燈

②御油の松並木資料館

④関川神社

⑤平成27年まで旅館業を営んでいた。
⑥赤坂宿の歴史を紹介。生涯学習センター内に設置。

⑥赤坂宿場資料室

⑤豊川市大橋屋（旧旅籠鯉屋）

地域とふれあう！ 四季カレンダー

春　豊川市桜まつり（3月下旬～4月上旬）
桜の開花にあわせ各種行事が行われる。

夏　御油夏まつり（8月第1土・日曜）
約3000発の打ち上げ花火が夜空を彩る。

秋　杉森八幡社祭礼（大名行列）（10月第2日曜）
東海道沿いを壮麗な大名行列が練り歩く。参勤交代の様子を再現。

赤坂の舞台 伝統芸能公演（10月下旬）
明治期の農村舞台で歌舞伎公演等が実施される。

冬　赤坂宿宮路もみじまつり（11月下旬）
宮路山は古来より紅葉の名所。紅葉の時期に合わせもみじまつりを開催する。

information

問 豊川市観光協会
☎ 0533-89-2206
所 豊川市諏訪3-133 プリオ5F

【豊川市観光ボランティアガイド（豊川市観光案内所内）】
FAX 0533-89-2412
（豊川市観光案内所）
（電話受付はなし）
※要予約・無料

名鉄名古屋本線 国府駅 徒歩15分 ① 御油の追分、秋葉山常夜燈 徒歩10分 ② 御油の松並木資料館 徒歩17分 ③ 御油のマツ並木 徒歩11分 ④ 関川神社 徒歩6分 ⑤ 豊川市大橋屋（旧旅籠鯉屋） 徒歩2分 ⑥ 赤坂宿場資料室（豊川市音羽生涯学習センター内） 徒歩22分 名鉄名古屋本線 名電赤坂駅

所要時間 約1時間23分
距離 約4.2km

家康幼少時ゆかりの寺が残る

間の宿

本宿（もとじゅく）

〈本宿〜山中〉

本宿の集落付近には古代東海道が通り宿駅が置かれたとされる。そのことから元の宿〝元宿〟と呼ばれ、それが地名になったと伝えられる。中世には法蔵寺の門前町が形成され、江戸時代に赤坂宿と藤川宿の間の〝間（あい）の宿〟に発展した。法蔵寺は松平家の菩提寺で徳川家康が幼少時に学問に励んだという。参勤交代の大名・旗本は下馬して参拝するのが習わしだった。境内には新選組局長近藤勇のものと伝わる首塚もある。江戸中期、本宿には旗本柴田氏（柴田勝家の子孫）が入り陣屋を置いた。旧代官屋敷が残る（＊）。

＊代官屋敷の建物はリノベーションしイタリアンレストランに、土蔵は郷土史資料展示室として一般公開している（ともに国登録有形文化財に登録）。

近藤勇の首塚

②法蔵寺

①御草紙掛松

①家康お手植えの松といわれている（現在の松は4代目）。 ②大宝元年（701）行基による開基と伝わる。徳川家ゆかりの品を所蔵する。 ③柴田氏に仕え陣屋代官職を世襲した富田家の居宅。文政10年（1827）の建築物。 ④日本レトルトフーズの前身である神谷合名会社（アイチ味噌溜店舗）時代の建物。 ⑤ 昭和3年（1928）竣工の額田郡本宿村の役場庁舎（三代目）を令和4年（2022）に復原。館内では地域の歴史文化を紹介する。

岡崎市

間の宿・本宿から山中へ

名鉄本宿駅で下車。地下道で国道下をくぐり本宿の町へ。T字路の東西の道が東海道。まず家康ゆかりの法蔵寺を訪ねる。来た道を戻り、東海道を北西に進む。本宿町沢渡の交差点で東海道は国道下に消える。国道脇の歩道を進み東海中学校入口の横断歩道または地下道で北側の歩道へ。200mほど進むと国道脇から東海道が現れ山中の町へ至る。

＊国道脇の歩道を歩く際は十分に注意を（または電車移動でもよい）。

③本宿旧代官屋敷（※郷土史資料展示室のみ一般公開）

⑤旧本宿村役場

④アイチ味噌溜店舗（※外観見学のみ）

地域とふれあう！ 四季カレンダー

夏　本宿夏祭り（7月第4日曜日）
古くはちょうちん祭りなどと呼ばれていた。4輌の山車が東海道を練り歩く。

冬　デンデンガッサリ（1月3日）
五穀豊穣を願い山中八幡宮に古くから伝わるお田植え神事。（山中八幡宮の位置はP14地図参照）

←国道と交わる交差点付近に松並木がまばらに残る。

information
問（一社）岡崎市観光協会
☎0564-64-1637
所 岡崎市康生通東二丁目47番地

名鉄名古屋本線 名電山中駅 → 徒歩30分 ⑤旧本宿村役場 → 徒歩5分 ④アイチ味噌溜店舗 → 徒歩8分 ③本宿旧代官屋敷 → 徒歩13分 ②法蔵寺 → 徒歩5分 ①御草紙掛松 → 徒歩12分 名鉄名古屋本線 本宿駅

所要時間 約1時間13分
距離 約3.7km

自然景観が美しい「歴史国道」選定の宿

藤川宿（ふじかわ）

〈山中〜藤川〉

藤川宿は、江戸日本橋から数えて37番目の宿場町。東隣の赤坂宿や西隣の岡崎宿に比べると小さな宿だった。藤川宿の名物はむらさき麦（＊）と藤の花で、その美しさが歌に詠まれた。松尾芭蕉の「爰（ここ）も三河　むらさき麦のかきつばた」が知られる。脇本陣門、本陣跡石垣など江戸期の遺構と古い町屋が点在し、町の東西には歌川広重の浮世絵に描かれた棒鼻が復元されている。松並木や街道の先に山の姿が見える〝山当て〟の道筋、里山など景観が美しい。平成8年（1996）には愛知県内で唯一「歴史国道」の選定を受けている。

＊むらさき麦は、昭和半ばに姿を消したが、平成6年（1994）に栽培に成功。今では5月中旬に美しく実る。

②東棒鼻

①舞木町ポケットパーク

③明星院

①冠木門のモニュメントを設けたポケットパーク。②歌川広重が浮世絵に描いた景観を復元。③本尊は不動明王立像で通称「片目の不動尊」と呼ばれる。

④藤川宿資料館（脇本陣跡）

④門は江戸中期の貴重な遺構。資料館内には宿場のジオラマや高札などを展示。 ⑤ 冥途で死者の罪状を決める十人の判官を祀る。境内に芭蕉句碑。

⑤芭蕉句碑

⑤十王堂

岡崎市

里山や田畑の緑に囲まれた宿場町を歩く

名鉄名電山中駅で下車。駅前を通る東海道を西へ進む。舞木町西の交差点で東海道は国道下に消える。国道脇の歩道を歩くが時間があれば国道の南の丘の山中八幡宮に立ち寄ってもよい。国道脇を300mほど進むと市場町の信号の先で国道から分岐して東海道が現れる。その先に藤川宿の東棒鼻（入口）。ここを通り鍵の手の道を左折すれば旧藤川宿だ。

＊国道脇の歩道を歩く際は十分に注意を（または電車移動でもよい）。

地域とふれあう！ 四季カレンダー

春　むらさき麦（5月中旬が見頃）
食料や染料に利用された紫色の麦。別名・紺屋麦。松尾芭蕉が俳句に詠んだことで知られる。

夏　からむし（8月〜10月開花）
古来から衣類などの繊維材料とされてきた植物。藤川では本陣石垣近くに自生地がある。

冬　松並木こも巻き（10月下旬より）
江戸時代から行われている害虫駆除法だが、現在は冬の風物詩として親しまれている。

味わいたい！ 地元の名産品

むらさき麦とろご飯
地元特産品たっぷり。道の駅限定メニュー。

山中八幡宮

⑥藤川の松並木

⑥約1キロメートルに渡り90本のクロマツがそそり立つ。

information
問（一社）岡崎市観光協会
☎0564-64-1637
所 岡崎市康生通東二丁目47番地

名鉄名古屋本線 藤川駅 → 徒歩15分 ⑥藤川の松並木 → 徒歩12分 ⑤十王堂 → 徒歩23分 ④藤川宿資料館（脇本陣跡） → 徒歩8分 ③明星院 → 徒歩20分 ②東棒鼻 → 徒歩15分 ①舞木町ポケットパーク → 徒歩9分 名鉄名古屋本線 名電山中駅

所要時間 約1時間42分
距離 約4.5km

東海道で最も屈折した二十七曲り

岡崎宿

岡崎宿は江戸日本橋から数えて38番目の宿場町。岡崎は徳川家康が生まれた岡崎城の城下町であり、また矢作川の舟運による物資集積で栄え、東海道の宿場町では三番目の規模を誇った。岡崎城は城下町を堀や土塁で囲った惣構えを持ち、東海道はその内側の外郭内に通され、「二十七曲り」と呼ばれる屈折の多い道筋となっている。これは城の中枢（内郭）の防衛とともに多くの町屋を立ち並べる工夫ともいわれる。戦災や都市化により町並みは失われ道路は拡幅されたが、八丁味噌の蔵が立ち並ぶ通りは風景が一変する。

❶岡崎二十七曲りの碑　二十七曲り説明碑

❷随念寺

① 岡崎宿のシンボル、二十七曲りの東の出発地点。道筋の解説とルート図が示されている。②徳川家康が祖父松平清康と大叔母於久の方の菩提を弔い創建した。楼門と白土塀が美しい。

岡崎市

案内柱をたどりながら二十七曲りを歩く

名鉄東岡崎駅から名鉄バスに乗車し岡崎げんき館前バス停下車。南へ200mほど直進すると冠木門と二十七曲りの碑に至る。ここを起点に東海道で最も屈折した道筋を歩く。所々に案内柱や道標があるのでそれに従って歩く。コース終盤はほのかに味噌の香りが漂う八丁味噌の蔵の道に至る。時間と体力があれば岡崎公園（岡崎城）に立ち寄ってもよい。

③岡崎信用金庫資料館

③大正6年（1917）に建築。赤レンガと地元産の御影石を組み合わせたルネッサンス風様式。④家康の故事にならい、毎年6月30日には厄除けの鳥居くぐりの神事が行われている。⑤道を挟んで光園寺の白壁と味噌蔵の黒壁のコントラストが約180メートルに渡って続く。

⑤八丁蔵通り

④新田白山神社

（右）家康が三河統一の拠点とした城。復興天守内部は、歴史資料館。（左）三河武士の源流、松平氏の歴史などを時代順に展示している。

三河武士のやかた家康館

岡崎城天守

地域とふれあう！四季カレンダー

春

家康行列（4月）
春の風物詩。公募で選ばれた家康公はじめ武士団や姫行列など700名余が練り歩く。

夏

岡崎城下家康公夏まつり花火大会
（8月第一土曜）
乙川河畔（殿橋下流）・矢作川河畔の会場でバラエティに富んだ花火が披露される。

味わいたい！地元の名産品

八丁味噌
大豆と塩だけで作られた岡崎名産の伝統的な赤味噌。

（右）20基の石彫が東海道有数の宿場町の歴史を語ってくれる。（左）いろは…と記号を追って二十七曲りを歩ける便利な標示。

information

問（一社）岡崎市観光協会
☎0564-64-1637
所 岡崎市康生通東二丁目47番地

【おかざき観光ボランティアの会】
☎0564-23-3751
※毎日 9:30～15:00（3月中旬～12月上旬。8月第1土曜～お盆過ぎまで休み）※要予約優先、無料

岡崎公園前駅 名鉄名古屋本線
徒歩10分 ⑤八丁蔵通り
徒歩15分 ④新田白山神社
徒歩45分 ③岡崎信用金庫資料館
徒歩15分 ②随念寺
徒歩35分 ①岡崎二十七曲りの碑
徒歩5分 岡崎げんき館前 名鉄バス

所要時間 約2時間5分
距離 約7.3km

木綿市と馬市で知られた市場の宿

池鯉鮒宿

池鯉鮒（＊）宿は江戸日本橋から数えて39番目の宿場町。かきつばたの名勝八橋と、にぎやかな市場で知られた。江戸時代、池鯉鮒は三河木綿の集積地となり木綿市が活況を博した。松尾芭蕉も「不断たつ池鯉鮒の宿の木綿市」の句を残している。さらにその木綿を運ぶ馬も取引されるようになり、松並木の周辺で開かれた馬市には、甲斐や信濃の荒馬が集まり、商人や見物客でごった返した。その盛大さは歌川広重の浮世絵にも描かれた。宿場町景観は失われたが、東海道三社の一つ知立神社や松並木が今なお残る。

＊読みは「ちりゅう」ともいう

❷来迎寺一里塚

❶無量壽寺

①名勝八橋の中心となる寺。境内の八橋史跡保存館では多数の文化財を所蔵。 ②江戸から数えて83番目の一里塚。街道両側の塚が残っている例は珍しい。

知立市

古社古刹と松並木に街道のにぎわいをしのぶ

名鉄三河八橋駅で下車。南に進むと無量壽寺。さらに600m進むとT字路の交差点で東海道に突き当たる。右に折れ西に進むと来迎寺の一里塚、さらに高速道路下を渡ると松並木の道に至る。並木道を直進し地下道で国道下をくぐる。県道と交わる中町交差点を北西へ。T字路を右折し了運寺の門前を左折。地下道をくぐり、すぐ右折すれば知立神社参道に至る。

④知立古城址

③馬市の碑（右側）

⑤知立神社

知立 松並木

③歌川広重の浮世絵にも描かれた馬市の碑。④知立神社の神主・永見氏の居館だった。⑤江戸時代には東海道三社の一つに数えられた。境内の多宝塔は国の重要文化財。

↑ここの松並木には側道があり、江戸時代に行われた馬市との関連が考えられている。

地域とふれあう！四季カレンダー

春

史跡八橋かきつばたまつり
（4月下旬～5月中旬）
八橋は在原業平ゆかりのかきつばたの名勝。ゴールデンウィークごろが一番の見ごろとなる。

知立まつり（5月2日・3日）
初夏を彩る知立神社の祭礼。本祭の時に山車上で上演される山車文楽・からくり人形芝居は必見。

知立公園花しょうぶまつり
（5月下旬～6月中旬）
明治神宮から下賜された花しょうぶが紫や白の花を咲かせ目を楽しませてくれる。

秋

秋葉まつり（9月中旬）
知立神社で披露される炎の高さ7mを超える勇壮な手筒花火が見もの。

味わいたい！地元の名産品

あんまき
ふっくらした皮と優しい甘みの餡が特色の銘菓。

information

問 知立市観光協会
☎0566-83-1111
所 知立市広見3-1

【知立市観光ガイドボランティアの会】
（知立市観光協会内）
☎0566-83-1111
※要予約・無料

→無量壽寺への道標として建てられた。来迎寺町と牛田町に現存。

名鉄名古屋本線 知立駅
徒歩12分 ⑤知立神社
徒歩10分 ④知立古城址
徒歩25分 ③馬市の碑
徒歩25分 ②来迎寺一里塚
徒歩15分 ①無量壽寺
徒歩8分 名鉄三河線 三河八橋駅

所要時間 約1時間35分
距離 約6km

鎌倉街道の面影

鎌倉街道とは、一般に源頼朝が鎌倉に幕府を開いて以来、各地から鎌倉に向かう主要な街道のこと。幕府によって全国各地に守護や地頭が置かれ、各赴任地に散った東国武士たちにとって「いざ鎌倉」の時に駆けつけるための道であった。その中で幕府が最も重要視した道こそが、東海道だった。

源頼朝は、鎌倉を根拠にして以来、京と鎌倉を結ぶ東海道を重視して文治元年（1185）、駅路之法を制定し、伊豆・駿河以西から近江まで伝馬を常備させた。この中世の東海道は「京・鎌倉往還」や単に「海道」と呼ばれた（江戸時代以降は「鎌倉街道（海道）」「鎌倉古海道」と呼ばれた）。

古代から平安時代の東海道は近江から鈴鹿峠を越えて伊勢を通って尾張に入る「伊勢廻り」コースだったが、中世の東海道は美濃の不破関（関ヶ原）を越えて青墓（大垣市）、墨俣から木曽川、長良川を越えて尾張に入る「美濃廻り」コースとなった。なお、どちらのコースも庄内川と五条川が交わる甚目寺町萱津（現あま市）で合流した。

愛知県内のルートは尾張では黒田、折戸（下津）、萱津、熱田、鳴海、沓掛、三河では八橋、八波木、作岡、山中、赤坂、渡津、今橋に宿があったとされる。ただし、平安時代後期から鎌倉時代初期の地殻や気候変化による海進現象のため、鮑海川（現 豊川）の河口部の渡河は不可能となり、新たに中流（豊川市当古付近）で渡河し、海岸部を避けた船形山越えのルートに変更されたという。全国を平定した源頼朝は、建久元年（1190）、上洛の途中この新たなルートをたどった。しかし、このルートも承久3年（1221）の承久の乱（*）以後、流域の変化があり元の海岸部のルートに戻ったといわれる。同じように熱田から鳴海に行く途中にあった鳴海潟を渡る道も干潮の変化や土砂の堆積により時代によってルートが変わったという。

鎌倉街道は、近世東海道よりさらに古いため、当時から今日にかけての土地そのものの変化や耕地化、宅地化によって道筋全てをたどることは困難である。唯一、残された地名や伝承、文学作品をもとに推定ルートが浮かび上がるが、愛知県では一宮市木曽川町黒田、あま市萱津地区、名古屋市瑞穂区・南区・緑区、豊明市沓掛町の二村山、知立市八橋町、豊橋市雲谷町や岩崎町などに古道の面影と史跡が伝えられている。

*承久の乱…後鳥羽上皇が鎌倉幕府に対し討幕の兵を挙げて敗れた争乱。

二村山
源頼朝歌碑（豊明市）

鞍掛神社（豊橋市）

豊橋市

雲谷町の普門寺、船形山付近から岩崎町には頼朝ゆかりの史跡が残る。

1.頼朝の庇護を受けた三河七御堂のひとつ。元は船形山の山岳寺院だが戦国時代に焼失。今川義元が再興した。
2.普門寺から船形山峠に登る道。
3.船形山山中の旧伽藍址。鎌倉街道はこの元堂付近を通っていたといわれる。
4.頼朝が鞍を奉納したという。 5.頼朝が愛馬を止め、休息した。 6.普門寺峠より尾根伝いに北へ。浜名湖が望める。

1. 普門寺
2. 豊橋自然歩道・普門寺コース
3. 普門寺 元堂址（もとどうあと）
4. 鞍掛神社
5. 頼朝駒止めの桜
6. 神石山からの眺望

あま市

萱津地区には鎌倉街道の宿があった。五条川堤防沿いに史跡が残る。

1.現代の道の下に鎌倉街道が眠る。
2.日本武尊（やまとたけるのみこと）と宮簀媛（みやずひめ）が逢えなかったという伝説にちなむ。
3.祭神は鹿屋野比売神（かやぬひめのかみ）。通称、漬物神社として親しまれる。 4.扉の前の漬物石を3回なでると漬物上手になれる。

1. 萱津の鎌倉街道
2. 阿和手森の石碑
3. 萱津神社
4. 萱津神社香の物殿

一宮市

木曽川町黒田には鎌倉街道の黒田宿（北宿と南宿）があったとされる。

1.頼朝が上洛した際に剣と寺領を寄進。頼朝が死んだ時、その剣が光ったため剣光寺と呼ばれた。 2.剣光寺の西北にある小さな橋。 3.鎌倉街道を旅してきた人の馬が休息中に、池に飲み込まれたという。
4.神社前の細い道が街道と伝わる。

1. 剣光寺
2. 頼朝橋
3. 馬取り池の碑
4. 伊富利部神社

知立市

知立市に残る鎌倉街道沿いには平安歌人在原業平ゆかりの史跡が点在する。

1.歌人在原業平の菩提を弔うために業平塚が築かれた折に創建。 2.根が2メートルほど持ち上がっていることから名づけられた。松の根元に「鎌倉街道之跡」の碑がある。
3.在原業平が東国に下った時の言い伝えが伝説として残っている場所。4.鎌倉末期に業平をしのんで建立されたものと考えられる。

1. 在原寺
2. 根上がりの松
3. 八橋伝説地
4. 業平供養塔

*愛知県内では、上記以外にも鎌倉街道の痕跡や言い伝えが残る場所があります。

日本遺産に認定された染織の町

間の宿

有松（ありまつ）

〈有松～鳴海〉

池鯉鮒宿と鳴海宿の間に設けられた〝間（あい）の宿〟有松は「有松絞り」で知られる。東海道を往来する旅人の土産物として考案された絞り染めは、やがて遠く江戸まで知れ渡り、街道筋の名産品へと育ち、財を築いた絞商たちの繁栄が町並みに印されている。その町並みは全国で唯一「染織町」として重要伝統的建造物群保存地区に選ばれ、さらに有松独自の伝統と文化のストーリーが評価され令和元年（2019）には日本遺産にも認定されている。歌川広重が『名物有松絞』の画題で描いた浮世絵の通り、店前を行き交う旅人のように町並み散策が堪能できる。

地域とふれあう！四季カレンダー

夏　有松絞りまつり
（6月第1土・日曜）
旧東海道筋でイベントや絞り製品の販売が行われ、毎年多くの人が訪れる盛大なまつり。

秋　有松山車まつり
（10月第1日曜）
歴史ある町並みを背景に、山車の上でくりひろげられる「からくり人形」の実演が見所。

手に入れたい！地元の名産品

有松・鳴海絞り工芸品
伝統の技を現代に生かした個性的な品が多数。

名古屋市

日本遺産認定の町並みで時を旅する

名鉄有松駅で下車。駅の南側に有松の町が広がる。一旦線路沿いに東に向かい、松野根橋を渡り町中に向かう。町並み保存地区内には絞商の豪壮な町家を中心に切妻平入形式（きりつまひらいり）の主屋が連続する。有松一里塚の前を通り、自動車道の高架下をくぐる。600mほど歩くと鳴海宿東口の平部常夜燈、さらに進み中島橋を渡り旧鳴海宿の町中に至る。

④平部町常夜燈

有松の町並み

⑤瑞泉寺

②有松・鳴海絞会館

①有松山車会館

⑥天神社

③有松一里塚

④宿場の東の入り口に文化3年（1806）に設置された。⑤東海道を西に向かう旅人の目印になった。山門は宇治の万福寺総門を模したもの。⑥成海神社の創祠の地。戦国期に鳴海城の一部とされていた。

①市文化財のからくり人形を載せた山車を見学できる。②有松絞りの歴史や技術を展示。絞り実演や体験もできる。③江戸から87里にあたる一里塚跡。平成24年（2012）に復元。

→「有松絞り」の開祖竹田庄九郎を称えた石碑が有松・鳴海絞会館の駐車場奥にある。

information（P19～21共通）
問 名古屋観光コンベンションビューロー
☎052-202-1143

名鉄名古屋本線 有松駅 —徒歩12分→ ①有松山車会館 —徒歩1分→ ②有松・鳴海絞会館 —徒歩22分→ ③有松一里塚 —徒歩20分→ ④平部町常夜燈 —徒歩15分→ ⑤瑞泉寺 —徒歩18分→ ⑥天神社 —徒歩5分→ 名鉄名古屋本線 鳴海駅

所要時間 約1時間33分
距離 約5.3km

松尾芭蕉がたびたび訪れた宿場町

鳴海（なるみ）宿

〈鳴海～笠寺〉

鳴海宿は江戸日本橋から数えて40番目の宿場町。古来、鳴海の地は鳴海潟と呼ばれた干潟が広がり歌枕に詠まれた景勝地であった。やがて鳴海丘陵（尾張丘陵）には社寺が多く立ち並び、桶狭間の戦いにまつわる城や砦も築かれた。その後、海退や干拓により陸地化が進み、東海道の道筋が定まり鳴海宿が置かれた。江戸中期には松尾芭蕉が四度訪ねている。鳴海も有松と同じく絞りの生産・販売を行い、「有松・鳴海絞り」とも呼ばれた。江戸時代から残る東西の常夜燈と数多い社寺が往時と変わらず存在する。

②丹下町常夜燈

①誓願寺

①松尾芭蕉最古の供養塔や芭蕉像が安置されている芭蕉堂が残る。②宿場町の西の入り口に寛政4年（1792）に設置された。③熱田神宮の東に位置するところから「東宮大明神」とも呼ばれていた。

③成海神社

名古屋市

歌枕や俳句に詠まれた干潟跡をゆく

名鉄鳴海駅を下車。北に200m進むと本町交差点。付近には松尾芭蕉ゆかりの誓願寺も。西へ進む東海道はカーブして北へ向かう。丹下町常夜燈、成海神社を訪ね、再び東海道を北へ600mで松尾芭蕉ゆかりの千句塚公園に至る。東海道は三王山交差点で北西に向かう。天白橋を渡り笠寺一里塚、緩やかな坂を上ると笠覆寺（笠寺観音）に至る。

④千句塚公園からの眺め

④千鳥塚

⑥笠覆寺（笠寺観音）

⑤笠寺一里塚

④松尾芭蕉生前に建てられ、本人直筆の文字が刻まれた碑はここだけ。
⑤江戸から88里にあたる一里塚。名古屋市内で唯一残っているもの。
⑥尾張四観音のひとつ。笠寺観音の名で親しまれている。

地域とふれあう！四季カレンダー

秋　成海神社例祭・鳴海祭（裏方）
（10月第2日曜日）
五穀豊穣を願い、4輌の山車と神輿が町を練り歩く。裏方とあるのは社が鳴海城の裏側に位置しているための呼称。

冬　笠寺観音節分会
（2月2日、3日）
毎年2月2日に節分会前夜祭、翌3日に節分会、豆まき祈祷を開催。

↑銀行店舗前に復元された高札場がある。

名鉄名古屋本線 鳴海駅 —徒歩4分→ ①誓願寺 —徒歩15分→ ②丹下町常夜燈 —徒歩5分→ ③成海神社 —徒歩15分→ ④千鳥塚 —徒歩20分→ ⑤笠寺一里塚 —徒歩8分→ ⑥笠覆寺（笠寺観音） —徒歩3分→ 名鉄名古屋本線 本笠寺駅

所要時間 約1時間10分
距離 約4.2km

東海道で最大規模を誇った宿場町

熱田（あつた）宿

〈笠寺～熱田〉

熱田宿は、江戸日本橋から数えて41番目の宿場町。熱田神宮の門前町でもあったことから「宮宿」とも呼ばれた。熱田宿は名古屋城下へ至る美濃路の分岐点であり、桑名まで海路七里の日和待ちの大名や旅人が宿泊したため、東海道随一の規模を誇った。天保14年（1843）の記録では本陣2軒、脇本陣1軒、旅籠248軒のほか、尾張藩の浜御殿や奉行所などが立ち並んだ。戦災と戦後復興、道路敷設により東海道や町は分断された。現在、かつての船着場跡に常夜燈が復元され、戦火を免れた旅籠屋建物（＊）が往時の名残をとどめている。

＊丹羽家住宅は、脇本陣格の旅籠屋だった。

❶富部神社

❸八丁畷（はっちょうなわて）公園

❷地蔵院

①徳川家康四男の松平忠吉が創建した。 ②人々が湯を浴びせ祈願したといわれる湯浴地蔵が安置されている。 ③織田信長が整備した浜の道（熱田～笠寺）に松並木が植えられ海から見ると一筋の縄に見えたという。熱田宿まで八丁の距離があったことから八丁縄手と呼ばれた。 ④小田原の陣で病死した息子を思う母の気持ちを刻んだ擬宝珠の名文で知られる。 ⑤三河と熱田をめぐる不思議な由来を持つ石地蔵を祀るお堂。 ⑥「七里の渡し」の船着場跡。常夜燈と時の鐘の鐘楼が復元されている。

地域とふれあう！四季カレンダー

夏 **熱田まつり**（6月初旬）
天皇陛下のおつかいである勅使が参向される、熱田神宮で最も重要で荘厳な祭り。

味わいたい！地元の名産品

ひつまぶし
刻んだ蒲焼きを用いたなごやめしの代表。

東海道一にぎわった町の面影をたどる

名古屋市

名鉄本笠寺駅下車し、北に進むと東海道に突き当たる。しばらく住宅街を歩く。400mほど進むと左手に富部神社の社叢や呼続公園の木々が見える。さらに進み山崎の坂道を下り、山崎橋を渡る。都市高速道下を走る堀田高岳線（空港線）の松田橋交差点で東海道は、国道下に消える。国道脇の歩道を進み、JR東海道本線ガード下をくぐると再び東海道が現れる。熱田橋を渡るとかつての宿場町があった場所に至る。

⑤ほうろく地蔵

④姥堂、裁断橋跡

⑥宮の渡し公園

⑦上知我麻神社（熱田神宮摂社）

⑦江戸時代は源太夫社と呼ばれ、⑤「ほうろく地蔵」の位置に鎮座していた。昭和24年（1949）に熱田神宮境内に遷座した。

名鉄名古屋本線 本笠寺駅 徒歩10分
① 富部神社 徒歩10分
② 地蔵院 徒歩20分
③ 八丁畷公園 徒歩20分
④ 姥堂、裁断橋跡 徒歩10分
⑤ ほうろく地蔵 徒歩10分
⑥ 宮の渡し公園 徒歩18分
⑦ 上知我麻神社（熱田神宮摂社） 徒歩7分
地下鉄名城線 熱田神宮伝馬町駅

所要時間 約1時間45分
距離 約6km

城下町名古屋をめぐる街道

〈名古屋城下略図〉

都や主要な城下町から外に延びる街道の出口を何々口と称したが、名古屋城下の主な出口は五つあり、俗に「名古屋の五口」と呼ばれた。第一は佐屋路や東海道に出る熱田口、第二は美濃路や途中で分岐する岐阜街道に出る枇杷島口、第三は木曽街道に出る志水口（清水口）、第四は下街道（善光寺街道）に出る大曽根口、第五は駿河街道や伊那街道（明治9年（1876）以降の飯田街道）に出る三河口であった。

尾張地域は古代から交通の要地であり、北に中山道（東山道）、南に東海道が走り、その二つの幹線道が最も接近する場所であった。清須越にはじまる名古屋城下町の建設は、同時に町と東海道、中山道との直結、さらに美濃・木曽の重要地域への街道新設が目論まれていた。

慶長15年（1610）、徳川家康は名古屋城の築城と城下町建設、運河開削（堀川）を行うとともに、戦国時代に清須城と那古野城（名古屋城の前身）を結んでいた街道や、信長死後、清須城主になった二男・織田信雄が美濃へ通じるために拓いた道などを整備し、これを名古屋の城下町に通した。この道が美濃路で、五街道に並ぶ重要な道として幕府が管理した。

さらに家康は慶長17年（1612）、大坂の豊臣方との決戦に備え、熱田を通らず名古屋と岡崎を結ぶ最短ルートとして駿河街道と平針宿を開設した。この道は、その後の大坂の陣の時、家康とその軍勢が利用し大坂に向かっている。

大坂夏の陣後、元和元年（1615）、木曽地方とその山林が尾張藩領となり、これを受け元和9年（1623）、藩によって名古屋と木曽地方を結ぶ木曽街道が拓かれた。木曽領を得た尾張藩では、参勤交代の経路に木曽街道～中山道をしばしば利用した。また元和5年（1619）岐阜町と長良川水運の支配権が尾張藩領になり、かつて信長が清須と岐阜間に拓いた道を整備し、美濃路から分岐した岐阜街道が拓かれた。尾張藩は、駿河街道、木曽街道、岐阜街道を藩営街道として五街道に準じた施設と制度を備え、整備した。

その他、木曽街道と同じく中山道に至る庶民の道であった下街道や、尾張地方の野菜などを下小田井市場に運んだ岩倉街道などが城下と結ばれていった。こうして名古屋城下は、街道ネットワークの結節点となり、各街道の起点は、城下町を南北に貫くメインストリートであった本町通と東西に走る伝馬町筋が交差する「伝馬会所札の辻」と定められていた。

それから約400年。時代の変化とともに、道幅は大きく変わり、ルートも変更された箇所も多くあるが、街道は今も名古屋の街中から延びる道路網に活きている。

城下町名古屋をめぐる街道

1 美濃路

名古屋城下を通り、東海道（熱田（宮）宿）と中山道（垂井宿）を結んだ街道。東海道の付属街道であり、宿場は名古屋・清須・稲葉・萩原・起・墨俣・大垣の七宿を数えた（大垣以外は尾張藩領）。参勤交代にも利用され、また、朝鮮通信使、琉球使節、御茶壷道中が通った。

旧桃杷島橋案内板（名古屋市西区）

2 岐阜街道

美濃路の四ツ家で分岐し、一宮、黒田を経て木曽川を渡り、美濃国に入り笠松、中山道加納宿を経て岐阜町（尾張藩領）に至る街道。

3 駿河街道

徳川家康が熱田（宮）を通らず、名古屋と岡崎を直接結ぶために拓いた街道。岡崎街道ともいう（＊名古屋から平針までを駿河街道として、平針から岡崎までを岡崎街道や平針街道とする説もある）。豊臣方との決戦を控え当初は軍事目的が強かったが、泰平の世となると平針・岡崎間の重要性が下がり、平針経由で接続していた伊那街道との結びつきが強まり、信州に向かう重要な交易路に変わっていった。

＊明治9年（1876）に伊那街道が県道三等飯田街道とされ、のちに名古屋・平針間の駿河街道も含まれ、現在に至っている。

駿河街道説明版（名古屋市昭和区・川名公園）

4 塩付街道

江戸時代初期、名古屋南部から旧愛知郡の海岸部の星崎七ヶ村（名古屋市南区星崎）には塩浜が広がり前浜と呼ばれた。ここで生産された塩を内陸に運んだ街道。街道は、伊那街道や瀬戸街道（品野街道）、下街道と合流し、塩は信州に運ばれた。

石仏町の旧街道（名古屋市昭和区）

5 木曽街道（上街道）

上街道ともいう。幕府から木曽の山林を拝領された尾張藩が開発した藩営街道。名古屋城下から小牧宿、楽田、善師野宿、美濃国土田宿を経て太田宿付近で中山道に合流する。

下之町の旧街道（小牧市）

6 稲置街道（犬山街道）

尾張藩が木曽街道を拓いた後、尾張藩重臣で犬山城主の成瀬正虎が拓いた。木曽街道の楽田追分で分岐し、犬山城下に至る街道。

本町通の風景（犬山市）

7 下街道（善光寺街道）

日本武尊の東征の帰り道という伝説が残る道。木曽街道を「上街道」と呼ぶのに対し、「下街道」と呼ばれた。名古屋大曽根から勝川、内津を経て美濃国へ入り中山道に合流する。名古屋から木曽方面に出るのに木曽街道に比べ距離も短く、平坦であったため、善光寺参りや伊勢参りの庶民をはじめ、物資の輸送でにぎわった。

道標（名古屋市東区）

8 岩倉街道

美濃路の下小田井で分岐し岩倉、小折（江南市布袋）に至る街道。江戸時代、枇杷島橋西詰めに下小田井の市場が設けられ、尾張北部でとれた青物がこの道を通り名古屋城下に運ばれた。

中小田井の旧街道（名古屋市西区）

9 八神街道

美濃路を清須宿で分岐して矢合、祖父江を経て木曽川を渡り、美濃国・八神に至る街道。八神には関ヶ原の戦い後、家康さらに尾張徳川家に仕えた毛利家（河内源氏末裔）の八神城があった。街道はそのまま北上し、長良川を渡り、中山道へ合流した。

10 佐屋路

東海道・熱田（宮）宿と桑名宿を海路で結んだ七里の渡しを避ける東海道のバイパス道。「東海道佐屋廻り」と呼ばれた。宿場は、岩塚・万場・神守・佐屋の四宿を数えた。佐屋湊からは桑名宿までは船で佐屋川、木曽川を渡った。佐屋宿は渡し場がある重要な宿で、将軍や紀州徳川家などの賓客用の佐屋御殿が設けられていた。

道標（名古屋市熱田区）

11 津島街道

中世の津島は木曽川の支流が流れ込み川湊として栄えた。美濃路の須ヶ口から分岐して津島に至る古くからの道。上街道とも呼ばれた。甚目寺から勝幡までは古代条里制の遺構を利用し、ほぼ一直線の道筋となっている。津島神社への参詣の道としてもにぎわった。

道標（津島市）

12 高須街道

津島街道の根高（愛西市）から分岐し、木曽川を越えて美濃国・高須に通じた街道。高須には尾張藩二代藩主徳川光友の二男が、幕府から所領を与えられ立藩した高須藩が置かれた。

13 瀬戸街道（品野街道）

名古屋城下の大曽根から瀬戸・品野、美濃国・柿野を経て信州へ通じた中馬の道として信州飯田街道とも呼ばれた。江戸後期以降は、瀬戸周辺で焼かれた陶磁器の運搬道となった。

14 水野街道

尾張藩初代藩主徳川義直が鷹狩を行い、その風光を愛でた水野の地。義直は定光寺を自らの墓所とした。歴代藩主が、藩祖を祀るこの道を通ったため〝殿様街道〟ともいう。瀬戸街道の新居で分岐し、水野から美濃国に入り下街道に合流した。

定光寺（瀬戸市）

15 山口街道

名古屋城下の東、出来町（古出来町）から猪子石、尾張旭の稲葉、三郷を経て瀬戸で信州飯田街道に合流した中馬の道。

16 高針街道

名古屋城築城以前から名古屋の東部と三河を結んだ古くからの道。名古屋城下から末森、高針、岩崎を通り、伊那街道に合流した。高針には中馬の馬宿があり、この道もかつては信州飯田街道と呼ばれた。

17 伊那街道（飯田街道）

平針から赤池、足助、武節、稲橋を経て信州伊那谷に至った道。古くから尾張・三河と信州を結んだ要路。戦国期には武田信玄や織田信長らの軍用道としても利用された。江戸時代以降は交易路として、中馬街道、塩の道、信州では三州街道とも呼ばれた。中馬の荷駄が往来し、信州からは木地椀や山地の産物が、名古屋からは塩や海産物が運ばれた。

＊吉田（豊橋）から新城、田口、津具を経て信州伊那谷に至った街道も「伊那街道」と呼ばれていた。地域により「伊奈」の表記、「伊那」の表記があった。

〝中馬の道〟に残る馬頭観音（豊田市足助町）

18 挙母街道

伊那街道の赤池から分岐し、和合を経て三河国に入り、挙母城下に至る街道。さらに矢作川を渡り、尾張藩の重臣渡邊家の所領地である寺部の南を通り、七里街道（足助街道）に合流していたという。明治以降に新城まで通じた。

19 平針街道

平針西口から八事丘陵のすそ野を通って東海道の山崎に合流した道。熱田神宮や伊勢神宮への宮参りの道として「みや道」とも呼ばれた。

20 百曲（ひゃくまがり）街道

慶安2年（1649）、熱田新田の干拓が行われた後、新田の北側の堤防上に自然にできた道。城下南の尾頭橋から下之一色を結んだ。堤防上の道がよく曲がっていたため、くねくね曲がっておりやがて「百曲街道」と呼ばれた。熱田新田は33に区画され（番割と呼ばれた）、干拓地に安全と守護を願い西国三十三ヶ所を模して観音堂が祀られた。

21 稲生街道

美濃路の江川から分岐し、浄心を北に小田井で岩倉街道と合流する道。名古屋城築城以前からの古道とされる。

22 西浦街道（常滑街道）

東海道の鳴海宿で分岐し、大高、横須賀、大野、常滑に至る街道。知多半島の西側を通るため西浦街道と呼ばれた。尾張藩二代藩主徳川光友は横須賀に御殿を建て、しばしば来臨した。

大高の旧街道（名古屋市緑区）

23 東浦街道（師崎街道）

海の面した知多半島の物資輸送は、海路が中心であったため、特に南部の陸路の整備は進まなかった。東海道の池鯉鮒宿（知立）で分岐し刈谷、緒川、半田、河和を経て師崎まで至る街道。知多半島の東側を通るため東浦街道という。

＊東海道の起点を東阿野（豊明市）とし以降、大府、緒川、半田、河和、師崎に至る道という説もある。

緒川の旧街道（東浦町）

＊上記地図は、江戸期の尾張地方の全街道図ではありません。
また地形や河川の形状はおおよその位置であり、略図としてご覧ください。

《愛知の美濃路

美濃路は、東海道と中山道を結んだ重要な街道。
陸路の道ゆえ将軍の上洛に、朝鮮通信使や琉球使節の貴人、
そして将軍家へ献上された象も運ばれた。
新たな道と交わり生活道路として生まれ変わった今もなお、
街道風景や史跡とともに時を刻む。
さあ、美濃路へ。

名古屋宿／札の辻跡（本町通・伝馬町通交差点）（名古屋市中区）

旧枇杷島橋案内板（名古屋市西区）

清須宿／清須宿本陣跡（清須市）

稲葉宿／稲葉宿本陣跡ひろば（稲沢市）

萩原宿／正瑞寺（一宮市）

起宿／富田一里塚（一宮市）

起宿／旧湊屋文右衛門邸（一宮市）

東海道と中山道を結んだ陸路の道

名古屋宿

〈丸の内〜東枇杷島〉

美濃路は、東海道の熱田宿（宮）と中山道の垂井宿を結んだ東海道の脇街道。宿場は名古屋、清須、稲葉、萩原、起、墨俣、大垣の七宿が置かれた。幕府の規定によれば、各宿には中山道と同じく50人・50疋の人馬が置かれ、五街道に次ぐ重要な街道とされた。このうち名古屋宿は特殊な宿場だった。本陣、脇本陣、旅籠はなく将軍や朝鮮通信使らの休泊を担った（＊1）。また名古屋宿の札の辻は、美濃路をはじめ、岡崎に至る駿河街道（＊2）、中山道伏見宿に通じる木曽街道、中山道大井宿に通じる下街道、各街道の起点であった（P22参照）。

＊1 諸大名は通過させ、一般の旅人は宿場に近い玉屋町（名古屋市中区）の旅籠を利用させた。
＊2 明治以降は飯田街道

清須越由来の橋、蔵の道、古民家が残る道

名古屋市

名古屋市営地下鉄丸の内駅5番口から東に向かい本町通を南へ。一本目の交差点が旧札の辻（本町通と伝馬通の交差点）。美濃路はそのまま西へ向かい、伝馬橋を渡り堀川沿いを北へ。中橋から五条橋にかけて美濃路と並行に四間道がある。幅下二丁目交差点を西へ。なごや小学校・幅下公園の敷地に沿って北へ。国道22号線を歩道橋で渡り3本目のT字路を西へ進む。後は庄内川まで一直線の道となる。

地域とふれあう！ 四季カレンダー

春 **提灯祭り**（5月第3土・日曜日）
八坂神社のおまつり。境内に沢山の提灯が飾られ、中でも高さ約20mの竿に吊るした「山笠提灯」は見物。

夏 **円頓寺七夕まつり**（7月最終水曜日から5日間）
アーケードには各店舗などが作成した張りぼてや装飾、出店が並ぶ。

②五条橋

①伝馬橋

①堀川七橋のひとつ。美濃路がこの橋を通っていたため江戸時代は一番のにぎわいであったといわれる。
②元は清須を流れる五条川に架かっていたものを「清須越」の際一緒に移した橋。現在の橋は昭和13年（1938）に架け替えられたもの。

④白山神社

③海福寺

⑤八坂神社

③新道六箇寺のひとつ。尾張徳川家初代徳川義直は、鷹狩に行った際にここでよく小憩したという。
④榎権現で親しまれる。織田信長が桶狭間の戦いの際、戦勝祈願に太刀一口を寄贈したといわれる。
⑤長寿延命と豊作祈願の提灯祭りが有名。

⑥江戸時代の枇杷島橋が架かっていたとされる位置に設置。江戸時代の橋は川の中にあった中島を中継し二つの橋が架かっていた。

⑥旧枇杷島橋案内板

information
問 名古屋観光コンベンションビューロー
☎ 052-202-1143

名鉄名古屋本線 東枇杷島駅 → 徒歩10分 → ⑥旧枇杷島橋案内板 → 徒歩15分 → ⑤八坂神社 → 徒歩7分 → ④白山神社 → 徒歩18分 → ③海福寺 → 徒歩27分 → ②五条橋 → 徒歩12分 → ①伝馬橋 → 徒歩19分 → 地下鉄桜通線／鶴舞線 丸の内駅

所要時間 約1時間48分
距離 約6km

信長をはじめ武将たちの面影に出会う

清須宿〜稲葉宿

美濃路は、信長死後、清須城主となった織田信雄（＊1）が清須から美濃方面へ至る道を改修したのが始まりといわれる。さらに信雄の後、城主となった豊臣秀次が伝馬制を敷き、清須、墨俣、大垣が宿駅となっていた。

清須は室町時代後期には、尾張の中心となったが、慶長15年（1610）の清須越で町は一時寂れた。しかし、美濃路が整備され新たに宿場が置かれ町は再びにぎわいを取り戻した。稲葉宿（＊2）は、美濃路では最も多い3か所の問屋場が設けられていた。稲葉村と小沢村の二村で宿駅機能を務めていたが、明治20年（1887）に合併し、稲沢村となり現在の市名となった。

＊1　信長二男。名の読みは「のぶかつ」「のぶお」の2つの説がある。
＊2　稲葉宿ルート、史跡紹介はP29に掲載

（右上）「須ケ口一里塚跡」。熱田宿から古渡、江川を経て3つ目の一里塚。（左上）屋根の上に祀る名古屋独特の屋根神様。秋葉、津島、熱田の三社を祀っている。（下）琉球使節や象、茶壺道中など多くの旅人が行き交った美濃路。

清須市

風情ある町家を眺め、清洲城へ向かうコース

名古屋から西北へ進み庄内川を越えて西枇杷島に入ると、橋詰神社の東に美濃路の道標が残されている。この辺りはかつて岩倉、八神、津島へ向かう各街道が集中していたため、市場や問屋町として栄えた。屋根神様を祀った家や豪壮な家屋、珍しい木造三階建てなど貴重な木造町家建築の家々が残る西枇杷島、須ケ口、清須宿の跡を歩き、清洲城を目指す。

①山田九左衛門家を移築した「問屋記念館」。問屋の暮らしを学ぶことができる　②町家を改修した休憩所「飴茶庵」。駄菓子の販売やギャラリーがある

③高さ3.6mの宝塔。寺の北に刑場があったことから罪人を弔うために建立。
④新川橋西詰にあるポケットパークには街道の道標や新川開削の碑などがある。
⑤寺の前の角に高札が立ち、「札ノ辻」と呼ばれていた。　⑥美濃路最大の建坪を誇ったが、地震や火災で正門だけが残る。
⑦平成元年（1989）に建設された模擬天守。館内は歴史資料館。

名鉄名古屋本線 西枇杷島駅 → ①西枇杷島問屋記念館（旧山田邸）（徒歩15分）→ ②飴茶庵（徒歩1分）→ ③瑞正寺（大宝塔）（徒歩5分）→ ④新川橋橋詰ポケットパーク（徒歩50分）→ ⑤清涼寺（徒歩3分）→ ⑥清須宿本陣跡（徒歩13分）→ ⑦清洲城 清須古城跡（徒歩23分）→ 名鉄名古屋本線 新清洲駅（徒歩12分）

所要時間 約2時間2分
距離 約7.2km

清須市・稲沢市

城下町らしさと信長の面影を感じるコース

JR清洲駅の東側から街道を歩くと、三差路や見通しの悪い曲がり角など、城下町らしい道が残る。長光寺前にある四ツ家追分の道標など、街道の旧跡も見逃せない。また織田信雄が父・信長の菩提寺として建てた総見院や、信長が愛飲した井戸水が湧いていた「臥松水（がしょうすい）」のある長光寺など信長ゆかりの地も多く、歴史の鼓動を感じることができるコースだ。

①元は織田信雄が父・信長の菩提寺として建立。清須越で移転した後、新たに建立された。
②南北朝時代の寄木造による秘蔵・虚空蔵菩薩坐像を安置する。
③（道標）岐阜街道との分岐にあたる四ツ家追分にあった道標。長光寺門前に移築された。
（町並み）長光寺付近は古い建物と現代的な民家が混在している。
（六角堂）長光寺のシンボル六角堂。六角形をした珍しい形の地蔵堂。
（井戸）織田信長が愛飲したと伝わる「臥松水」といわれる井戸。

④美濃路と岐阜街道の分岐点を示す。
⑤豊臣秀吉の五奉行の一人であった長束正家の屋敷があった地。　⑥農商業守護、厄除けの神として信仰される「尾張大國霊神社（国府宮）」の一の鳥居。

information

問 清須市観光協会
☎ 052-400-2911
所 清須市須ケ口1238

【清須市ガイドボランティアの会】
☎ 052-400-2911
（清須市役所産業課内 清須市観光協会）
※要予約・無料（随時コースは有料）

問 稲沢市観光協会
☎ 0587-22-1414
所 稲沢市朝府町15-12
稲沢市産業会館内

【稲沢市観光協会観光ボランティア】
☎ 0587-22-1414
（稲沢市観光協会事務局内）※要予約・無料

JR東海道本線 清洲駅 → ①総見院（徒歩15分）→ ②亀翁寺（徒歩4分）→ ③長光寺（徒歩10分）→ ④四ツ家追分跡（徒歩5分）→ ⑤長東正家邸跡（徒歩35分）→ ⑥国府宮一ノ鳥居（徒歩23分）→ 名鉄名古屋本線 国府宮駅（徒歩15分）

所要時間 約1時間47分
距離 約6.4km

地域とふれあう！四季カレンダー

春　いなざわ植木まつり（4月20日〜29日）
国府宮参道一帯で植木・苗木の即売、体験講座やマルシェなどを開催。

夏　尾張西枇杷島まつり（6月上旬の土・日曜）
200余年の伝統ある山車がひき回され、美濃路に夏の訪れを告げる。

秋　清洲城信長まつり（10月中旬）
清洲城を中心に、時代行列や火縄銃演武、各種アトラクションを開催。

冬　清洲城で初日の出（1月1日）
毎年元旦の午前6時30分から城を開館し、清洲城天主閣から初日の出を望むイベント。

天下の奇祭 国府宮はだか祭（旧暦正月13日）
42歳と25歳の厄年を迎える男性を中心に、サラシの褌に白足袋姿の数千人の裸男が集まり、厄除けを祈願する奇祭。

味わいたい！地元の名産品

土田南瓜カレー（清須市）
清須特産の土田かぼちゃを使ったカレー。

川面を渡る風とともに尾張側の終点へ

稲葉宿〜萩原宿〜起宿

美濃路は、濃尾平野を貫く道のため平坦な道が続くが、美濃国では大河川が多かった。輪中地帯を流れる揖斐川（佐渡川）、長良川（墨俣川）、境川（小熊川）、尾張と美濃の国境を流れる木曽川（起川）はいずれも渡船による通行であった。一方、尾張国では庄内川に枇杷島橋、日光川（萩原川）には萩原橋が架けられていた。

萩原橋のあった萩原宿は、小さな宿場だったが、幕府の巡見使が通った巡見街道が交わり、西美濃に続く多良街道の起点でもあったため陸上交通のターミナルでもあった。起宿は、木曽川を渡る起渡船場のある宿場町で、水陸交通の拠点としてにぎわい、明治時代以降も織物の町として栄えた。

①美濃路稲葉宿本陣跡ひろば

②稲葉宿問屋場跡

③津島道道標

①美濃路稲葉宿本陣跡ひろばの門前には稲葉宿本陣跡の石碑が立つ。②3つの問屋場の内、中問屋場を務めていた伊東氏邸前。③南へ続く津島道を示す道標。「右つしま道三里」と刻まれた石の円柱。

稲沢市・一宮市

問屋場を中心に栄えた宿場町を歩くコース

東、中、西に問屋場が置かれていた稲葉宿。中問屋場を務めた伊東家の前には現在石碑があり、格子の立派な町家造りが歴史を伝えている。三代将軍徳川家光が上洛した際に宿とした禅源寺や、街道沿いに鳥居がある中嶋宮を経て立場茶屋のあった高木へ。茶屋で一服する人々の賑わいを思い浮かべながら、国道ー55号を越えて萩原宿へ向かう。

④禅源寺

⑤中嶋宮鳥居

⑥正瑞寺

⑦萩原宿問屋場跡

④三代将軍徳川家光が旅宿にしたほか、朝鮮通信使や琉球使節とも関係が深い。⑤街道沿いにある中嶋宮の鳥居。社殿は離れて建ち、隣接して長隆寺がある。⑥正瑞寺の前には高札場が置かれていた。⑦萩原宿は上町と下町に問屋場が置かれていた。上問屋跡に石碑が建っている。

地域とふれあう！四季カレンダー

春

桃花祭（4月1日〜3日）
真清田神社の例祭。短冊祭、歩射神事、神輿渡御（みこしとぎょ）のほか、武者行列など見所も多い。

全国選抜チンドン祭（5月下旬）
萩原商店街で開催。全国から集まるチンドンマンがパフォーマンスを披露する。

秋

びさいまつり（10月第4日曜・前日）
十二単衣を着た織姫、童女が登場する織姫パレードや踊る仮装パレードが町を盛り上げる。

紅葉のおもてなし（11月下旬）
一宮市尾西歴史民俗資料館別館・旧林家住宅で、庭園の紅葉の中で茶会や演奏会を開催。

そぶえイチョウ黄葉まつり（11月下旬）
稲沢市祖父江町をイチョウが黄金色に彩る季節に合わせて和太鼓の演奏や多彩なイベントを開催。

味わいたい！地元の名産品

祖父江ぎんなん（稲沢市）
日本を代表する産地。
菓子や麺など加工品もある。

串作庄屋・佐藤家跡

高木一里塚跡

（右）商店の横に残る高木一里塚跡の碑。明治の初めまで榎が残っていた。（左）串作庄屋・佐藤家跡。徳川家茂が上洛の際休憩した地。

名鉄尾西線 萩原駅 → 徒歩13分 → ⑦萩原宿問屋場跡 → 徒歩3分 → ⑥正瑞寺 → 徒歩52分 → ⑤中嶋宮鳥居 → 徒歩30分 → ④禅源寺 → 徒歩9分 → ③津島道道標 → 徒歩1分 → ②稲葉宿問屋場跡 → 徒歩5分 → ①美濃路稲葉宿本陣跡ひろば → 徒歩27分 → 名鉄名古屋本線 国府宮駅

所要時間 約2時間20分
距離 約8.4km

②聖徳寺跡

①冨田一里塚

（町並み）古い町家や蔵が多く残り、宿場町ならではの風情を色濃く伝えている。
①美濃路で唯一両側に塚が残る「冨田一里塚」。西側には公園が整備されている。
②織田信長と舅の斎藤道三が会見したと伝わる聖徳寺があった場所。

起宿の町並み

③（右）起宿脇本陣を務めた林家の建物。内部と日本庭園を公開。（左）起宿や美濃路や織物に関する資料を中心に展示。

③一宮市尾西歴史民俗資料館

③起宿脇本陣跡（旧林家住宅）

一宮市

水陸交通の要として栄えた起を目指すコース

名鉄萩原駅からまずは冨田の一里塚へ。街道の両側に榎の木が残り、美濃路で唯一原形をとどめる貴重な一里塚である。美濃路をしばし逸れて、織田信長と舅の斎藤道三が初対面した聖徳寺跡へ立ち寄り、そのまま北へ向かう。木造の町家が点在する起の宿場跡で歴史の薫りに包まれながら木曽川の渡船場跡に着くと、尾張側の美濃路は終点となる。

④高札場跡、船橋河戸跡

⑤旧湊屋文右衛門邸

⑥起渡船場跡〜定渡船場跡、常夜燈

④船橋河戸の近くに高札場があった。⑤街道から定渡船場に向かう角に建つ「旧湊屋文右衛門邸」は明治初期に建てられた商家。⑥金刀比羅社前の定渡船場跡。他に宮河戸と船橋河戸に渡し口があった。

宮河戸跡

駒塚道道標

（右）尾張藩家老の石河氏が名古屋城に参勤した道の分岐点。（左）大明神社前から対岸の新井村の燈明河戸へ向かう渡し口。

木曽川の風景

←起渡船場には3か所の渡し場所があった。

名鉄バス 濃尾大橋口 → 徒歩11分 → ⑥起渡船場跡〜定渡船場跡、常夜燈 → 徒歩1分 → ⑤旧湊屋文右衛門邸 → 徒歩10分 → ④高札場跡、船橋河戸跡 → 徒歩3分 → ③起宿脇本陣跡（旧林家住宅）、一宮市尾西歴史民俗資料館 → 徒歩13分 → ②聖徳寺跡 → 徒歩17分 → ①冨田一里塚 → 徒歩53分 → 名鉄尾西線 萩原駅

所要時間 約1時間48分
距離 約6.4km

information

問 稲沢市観光協会
☎0587-22-1414
所 稲沢市朝府町15-12
稲沢市産業会館内

【稲沢市観光協会観光ボランティア】
☎0587-22-1414
（稲沢市観光協会事務局内）
※要予約・無料

問 一宮市観光協会 ☎0586-28-9131
所 一宮市本町2-5-6 一宮市役所内

《愛知の飯田街道》

飯田街道は、名古屋城下から平針、足助、稲武を経て信州に至った道。
名古屋城下に山野の産物を運び、
信州には塩や海産物を運んだ交易の道であり、
また善光寺詣でに向かう参詣の道でもあった。
街道の歴史や文化、景色とともに今もなお、
愛知と南信州をつなぐ交流の道として時を刻む。
さあ、飯田街道へ。

飯田街道・案内標識（名古屋東区）

川原神社（名古屋市昭和区）

八事山興正寺（名古屋市昭和区）

宗恩寺からの眺め（豊田市足助町）

真弓橋と足助川（豊田市足助町）

稲武の町並み（豊田市稲武町）

夏焼の山道（豊田市稲武町）

家康が拓いた名古屋と岡崎を結んだ道
東桜～杁中

かつて名古屋から信州伊那地方に向かった道はいくつも存在し飯田街道と呼ばれた道は複数あった（＊1）。このうち平針（名古屋市天白区）から足助、武節、稲橋（いずれも豊田市）を経て信州飯田に向かった伊那街道が、明治9年（1876）に正式に県道飯田街道に指定。その後名古屋・平針間の駿河街道（＊2）が含まれ、現在、飯田街道としてすっかり定着している。

駿河街道は、豊臣方との決戦を控えた徳川家康が名古屋と岡崎を最短で結ぶ道として拓かせた道。名古屋城下に入る街道入り口には寺院が計画的に移転させられ〝東寺町〟がつくられた。戦災や都市再開発で移転や縮小したものの、今日も多くの寺院が集まる。

＊1 瀬戸街道や高針街道にも信州飯田街道の呼称があった（P23・24参照）。
＊2 名古屋城下の駿河町（名古屋市東区東桜）、平針を経て東海道の宇頭（岡崎市）に至る道。岡崎街道とも呼ばれた。

①西蓮寺

①含笑寺

②白山神社

①西蓮寺、含笑寺、法華寺など〝東寺町〟の多く寺院は清須越で移転してきた。②前方後円墳の上に建つ社。③大正のころ八事の路傍に放置された石仏を信心深い人が見かねて安置したという。④弁財天も祀られていることから「川名の弁天様」として親しまれてきた。⑤総門と山門（丸門ともいわれる）は江戸時代に建立された当時のものといわれる。

小坂の地蔵堂

③車田町の三体の石仏

⑤香積院

④川原神社

名古屋市

今なお街中を斜めに貫く街道の面影

名古屋市営地下鉄久屋大通駅3B番出口から南に向かう。I本目の道が旧街道。街中を南東へ斜行しているのでわかりやすい。国道41号線を渡ると〝東寺町〟。ビルの谷間に寺院が立ち並ぶ。新栄三丁目交差点の南にある白山神社は古墳の上に建つ社。若宮大通を渡ると道幅が狭くなるが道筋に石仏や地蔵堂がある。道は川名公園内を貫き、杁中・八事に至る。

地域とふれあう！ 四季カレンダー

夏 **川原神社夏祭り**（7月4日、5日）
無病息災を願って茅ノ輪くぐりの神事が行われている。

秋 **名古屋まつり**（10月第3土・日曜日）
名古屋最大の祭り。郷土英傑行列や山車揃などの豪華絢爛なパレードや久屋大通公園ではステージやグルメも楽しめる。

→名古屋市立富士中学校と名古屋市立東桜小学校の間の歩道橋には「駿河町」の名が残る。

information
問 名古屋観光コンベンションビューロー
☎ 052-202-1143

地下鉄鶴舞線 いりなか駅 → 徒歩8分 → ⑤香積院 → 徒歩22分 → ④川原神社 → 徒歩30分 → ③車田町の三体の石仏 → 徒歩24分 → ②白山神社 → 徒歩18分 → ①西蓮寺、含笑寺 → 徒歩10分 → 地下鉄名城線／桜通線 久屋大通駅

所要時間 約1時間52分
距離 約6.8km

中馬が往来した交易の道と商家町

八事（やごと）～平針（ひらばり）、足助（あすけ）

飯田街道はその道筋に多くの峠道があったが、名古屋城下を出て最初の峠道が八事山を通った。当初この道は軍事用であったがやがて交易の道として役割を変え、また風光明媚な八事の山々には〝山行き〟と称し、文人や庶民たちが通った。明治末期には鉄道馬車も敷かれ行楽地としてにぎわった。

八事山を越えた道は、平針か赤池、上伊保（かみいぼ）、四郷（しごう）、枝下（しだれ）さらに力石峠を越えて力石、足助に至った（＊）。足助は中馬によって運ばれた物資の集積地として人馬が行き交い栄えた商家町。足助川に沿う段丘上に位置する町並みにその繁栄の証しを今に伝える。平成23年（2011）に愛知県初の重要伝統的建造群保存地区に選定されている。

＊赤池は日進市。上伊保、四郷、枝下、力石、足助はいずれも豊田市に含まれる。平針と伊那街道がつながったのは江戸時代後期とされる。さらに明治時代になってからも街道ルートは幾度か変更された。

①八事山興正寺

①愛知県下唯一の木造五重塔は、国の重文指定。興正寺は、街道の峠道を守る「砦」の役割を担っていた。 ②祭神は、製塩の技術を伝えた神であり、現在は安産の守護神とされる。 ③（右）八幡宮境内には、前方後円式古墳の一部が残る。（左）八幡宮門前の真向かいに馬頭観音がある。

名古屋市

八事山から家康ゆかりの平針宿をたどるコース

江戸時代は、城下を出て最初の山道が八事山だった。五重塔がそびえる興正寺から、今はビルや住宅地の間を通る旧道を東へ歩く。風景は違うが、勾配は山道を感じさせる。途中、街道から外れ案内板に従い塩竈神社へ。急坂を下り国道153号線に戻る。植田川を渡り、家康が設置させた平針の旧宿場へ。わずかに残る古い家屋が歴史を感じさせる。

③馬頭観音

③植田八幡宮

②塩竈神社

④原の道標

⑥秋葉山慈眼寺

⑤秀伝寺

④石仏を彫った道標。飯田街道と、熱田（宮）・伊勢に続く街道の分岐点にある。
⑤家康が、平針宿を設ける際に、再興を命じた。山門は、太平洋戦争の空襲を免れたもの。
⑥信長が桶狭間の戦いの際に、戦勝祈願をしたと伝わる。

→平針宿を通った街道は、平針街道とも姫街道とも呼ばれていた

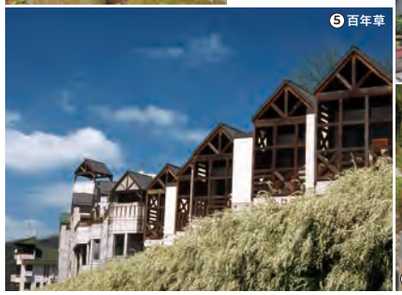
information

問 名古屋観光コンベンションビューロー
☎ 052-202-1143

所要時間 約2時間16分
距離 約8.2km

地下鉄鶴舞線 いりなか駅 → 徒歩15分 → ① 八事山興正寺 → 徒歩27分 → ② 塩竈神社 → 徒歩20分 → ③ 植田八幡宮、馬頭観音 → 徒歩24分 → ④ 原の道標 → 徒歩17分 → ⑤ 秀伝寺 → 徒歩10分 → ⑥ 秋葉山慈眼寺 → 徒歩23分 → 地下鉄鶴舞線 赤池駅

⑥尹良親王袈裟かけ石（今朝平八幡神社境内）


⑤百年草

③足助中馬館

マンリン小路

③稲橋銀行足助支店社屋を利用した資料館。県指定文化財。
④大給松平家は、十八松平家のひとつ。子孫は三河西尾藩主となった。 ⑤日帰り入浴施設や手作りハム工房などが入る複合施設。 ⑥後醍醐天皇の孫・尹良親王ゆかりの史跡は足助、稲武に残る。

④大給（おきゅう）松平家先祖の墓

②宗恩寺

①馬頭観音、牛馬摂待水

（上）板壁と白壁に囲まれ街道から裏道、宗恩寺へと通じている小路。
①馬頭観音坐像下には街道を往来した馬のための水飲み場跡がある。
②町並みを一望する高台に立つ。鐘の音の美しさでも知られる寺。

豊田市

商人の心を伝える古い町並みを歩くコース

足助は戦国時代、足助城山麓の集落を形成し、江戸時代に入ると宿場的要素に加え、塩問屋を中心に商業の町として発展した。太平洋岸と山岳地帯を結ぶ交易の要路となった街道沿いには、今なお白壁の土蔵や重厚な造りの町家が軒を連ね、往時をしのばせる。南北朝時代の尹良親王（ゆきよし）ゆかりの史跡や紅葉で名高い香嵐渓など見どころの多いコース。

地域とふれあう！四季カレンダー

春 **中馬のおひなさん**（2月上旬～3月上旬）
足助の家々や商家に伝わるおひなさんや土びなが軒先などに飾られ、町を彩る。

夏 **足助夏まつり**（8月初旬～15日）
町内に約6000本のろうそくが灯される足助川万灯まつりや灯ろう流しなどを開催。

秋 **香嵐渓もみじまつり**（11月上旬～12月上旬）
祭り期間中はライトアップや茶会、和太鼓の演奏も。見ごろは11月中旬から12月上旬。

味わいたい！地元の名産品

もみじの衣揚げ
もみじの葉を塩漬けにして揚げた名産品。

⑦城跡公園 足助城

⑧香積寺

⑦戦国時代の山城の景観を、発掘調査に基づき、できる限り考証を行い復元。 ⑧江戸時代の三栄和尚が香嵐渓紅葉の生みの親と伝わる。

香嵐渓

参州楼

（右）木の温もりに包まれた洋食店。ハヤシライスやシチューなどが味わえる。
（左）巴川沿いに広がる香嵐渓は四季折々に美しい景観を見せてくれる。

information

問 豊田市足助観光協会
☎ 0565-62-1272
所 豊田市足助町宮平34-1

【三州足助ボランティアガイドの会】
☎ 0565-62-1272（足助観光協会内）※要予約・無料
（案内中の入館料等については、実費を負担）

所要時間 約2時間42分
距離 約8.7km

おいでんバス 香嵐渓 → 徒歩15分 → ① 馬頭観音、牛馬摂待水 → 徒歩13分 → ② 宗恩寺 → 徒歩8分 → ③ 足助中馬館 → 徒歩19分 → ④ 大給松平家先祖の墓 → 徒歩5分 → ⑤ 百年草 → 徒歩13分 → ⑥ 尹良親王袈裟かけ石 → 徒歩34分 → ⑦ 城跡公園 足助城 → 徒歩32分 → ⑧ 香積寺 → 徒歩23分 → おいでんバス 足助大橋

足助の塩

かつて日本では、塩の生産は海辺に限定されていた。そのため内陸へは陸路を利用するか、もしくは川船で河川をさかのぼり、馬の背に載せ替えて内陸へと運ばれた。水運や陸路で足助に集められた各地の塩は、新たな俵に詰め直し信州に運ばれた。これが「足助塩」と呼ばれた塩である。

◆家康のお墨付きを得た岡崎の塩座と、塩の道の拠点、足助。

江戸時代、三河湾から矢作川を船で運ばれた塩は、岡崎の塩座と呼ばれる塩商人の組織に納めることが義務付けられ、塩座を通さなければ入手できなかった。戦国時代、松平氏の軍事物資を扱っていた商人たちが信州に塩を販売していた。彼らは、家康の命で三河侵攻を意図する武田信玄の軍勢の物見役を務めた。その功績を称え、家康が塩座の特権を与えたことにはじまるといわれる。矢作川を上る塩船は、岡崎から上流へ直接の移入が禁止されたため、一旦すべての塩を陸揚げして塩座に通し、運搬しなければならなかった。塩座は、岡崎藩以外の他領にまで影響を及ぼすほどの権限があったとされるが、明治維新を機に廃止され、自由な売買が可能となった。

一方、岡崎の塩座の影響を受けていた足助の塩問屋は、その消滅により塩の商いがいっそう活発となり、明治20年代にいたっても13軒の塩問屋を有するなど繁栄が続いた。三河産の塩をはじめ、半田の成岩塩、西国塩など各地の塩が移入された足助の塩問屋では、長く険しい山道輸送に備えるために塩の包装を整える「塩ふみ」「塩なおし」という作業を行っており、足助の田町にあった莨屋にも、塩なおしの作業場があった。詰め直された塩は、伊那地方で「足助塩」と称された。塩なおしが行われた背景には、産地による1俵あたりの内容量の違いを統一する目的などもあった。

足助の塩問屋では、目方を1俵あたり7貫目（約26kg）に合わせ、馬1頭の背に4俵ずつ載せて運ばれた。明治時代の記録によると、年間2万俵を超える塩が、中馬により足助から信州に運ばれたとされ、街道は〝中馬街道〟や〝塩の道〟と呼び表わされた。

しかし、明治末期に国鉄中央線が全通するなど鉄道の発展が著しくなると、塩をはじめとした物資の輸送も鉄道利用へと移行し、宿場の賑わいは姿を潜めていく。大正中期、莨屋の廃業を持って「足助塩」は姿を消すことになった。

現在の莨屋外観

宗恩寺から見た足助の町並み（豊田市）

稲武（*）

南朝の皇子や武田家ゆかりの道は信州へ

足助の町を過ぎ、信州へと向かう街道は難所が続く。中馬や善光寺参り、伊勢詣での旅人らが利用した伊勢神峠を越えると六部峠や水別峠が続き、やがて武節の町中へ入る。武節の町は、東西を貫く飯田街道（伊那街道）、南へ向かう名倉通（新城へ至る道で秋葉神社への参拝道でもあった）、北に伸びる美濃街道の分岐点にあり、物資の運搬や参拝者でにぎわった。街道は、地蔵峠や難所の杣路峠と続き、信州・根羽に至った。

＊稲武は、昭和15年（1940）武節村と稲橋村が合併して成立した町。二つの名を一字ずつ組み合わせ町名とした。平成17年（2005）豊田市に編入されたが、広域地名「稲武地区」として存続している。

②大和屋

①尹良親王腰掛け石

④瑞龍寺

③戦国時代から現存する道

①南朝方の皇子・尹良親王の史跡のひとつ。親王の伝説は奥三河から南信州に点在。 ②武節の町で材木商の傍ら塩問屋を営んでいた。③ 戦国時代から残る古道。名倉川を渡る手前に関所が設けられていた。④推定400年弱の枝垂桜の名所。

豊田市

尹良親王や戦国武将の足跡を辿るコース

街道は足助から伊勢神峠を経て稲武に入る。市街地の旧道沿いでひと際目を引くのが、材木問屋の傍ら塩の中継問屋を営んでいた「大和屋」の町家。武節宿として栄えた宿場町の豪商らしい風格が漂う。また多くの武将と所縁がある武節城跡や、足助から続く尹良親王に関連するスポットの周辺には数々の伝説が残されており、歴史への好奇心をかき立てる。

⑦武節城址

⑤国道153号と257号線の交差点に立ち、鳳来寺道と善光寺道（＝飯田街道）を示す。⑥古橋家が造成した公園で城ヶ山の登山口の一つでもある。

⑤寛政９年の道標

⑧道の駅 どんぐりの里いなぶ

⑥大井平公園

⑦長篠の戦いに敗れた武田勝頼がもてなしを受けた。⑧稲武の物産品を販売する。温泉施設や体験工房も隣接。

秋葉山常夜燈

姫井戸

（右）武節城落城の際に姫たちが身投げしたと伝わる井戸。 （左）秋葉山本宮秋葉神社（浜松市天竜区）に向かう人々のために建てられた。

おいでんバス 御所貝津 → 徒歩4分 → ①尹良親王腰掛け石 → 徒歩16分 → ②大和屋 → 徒歩5分 → ③戦国時代から現存する道 → 徒歩5分 → ④瑞龍寺 → 徒歩2分 → ⑤寛政9年の道標 → 徒歩10分 → ⑥大井平公園 → 徒歩20分 → ⑦武節城址 → 徒歩5分 → ⑧道の駅 どんぐりの里いなぶ → 徒歩1分 → おいでんバス どんぐりの湯前

所要時間 約1時間8分

距離 約4.2km

地域とふれあう！四季カレンダー

春 **いなぶ旧暦のひな祭り**（2月第1土曜日～4月3日）
福よせ雛や昔ながらの御殿雛、土雛が展示される。

夏 **稲武まつり**（8月）
廻り太鼓や手踊りは参加型。力強く山にこだまする音と大輪の花が魅力的な打ち上げ花火。

秋 **大井平公園もみじ狩り**（11月上旬～中旬）
稲武の名家、古橋家が造成した公園。森と渓谷の鮮やかな紅葉が楽しめる。

冬 **氷瀑**（1月～2月）
やぐらを組み湧水をかけて作る氷瀑。ライトアップあり。

味わいたい！地元の名産品

ブルーベリージャム
名産のブルーベリーを使った商品が多彩。

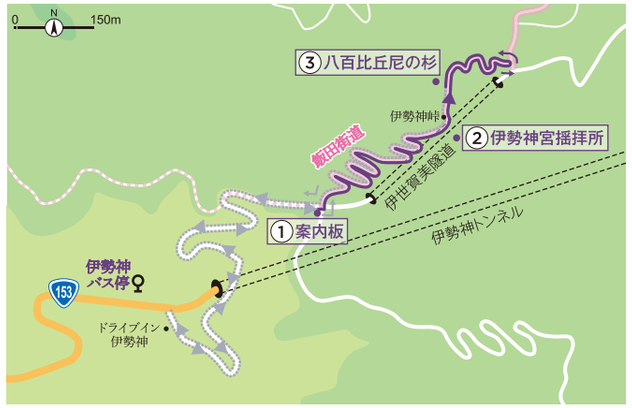
からすみ
うるち米の粉、砂糖、塩で作る伝統菓子。

information
問 いなぶ観光協会 ☎0565-83-3200
所 豊田市武節町針原4-1

〈豊田市〉伊勢神峠　江戸、明治、昭和三代にわたる峠道の変遷

足助と稲武を結ぶ伊勢神峠。元は「石神峠」「石亀峠」だったが、伊勢神宮の揺拝所が設けられ「伊勢拝峠」に改められた。現在の主要道は昭和35年（1960）竣工の伊勢神トンネルだが、その真上に明治30年（1897）に造られた石造りの伊世賀美隧道、さらにその上に中馬の人馬や善光寺、伊勢参りの旅人が歩いた峠道も残され、「街道の変遷を知る交通博物館」とも称される。

＊2012年から伊勢神トンネル改良事業（新トンネル）の調査が開始されている。



伊勢神峠

①「中馬の難所　伊勢神峠」の案内板。　②伊勢神宮を遥かに望む場所に立つ。　③八百比丘尼（はつびゃくびくに）にまつわる伝説は全国に残る。

伊世賀美隧道

↑長さ308m、高さ3.3m、幅3.15m。このトンネルの竣工によって運送馬車の往来が可能になったという。

③八百比丘尼の杉

①案内板

②伊勢神宮揺拝所

information

問 豊田市足助観光協会
☎ 0565-62-1272
所 豊田市足助町宮平34-1

◎「伊勢神峠」にはトイレがありません。また季節によっては害獣、害虫対策を考慮してください。

おいでんバス 伊勢神 —徒歩20分→ ① 案内板 —徒歩20分→ ② 伊勢神宮揺拝所 —徒歩5分→ ③ 八百比丘尼の杉 —徒歩35分→ おいでんバス 伊勢神

所要時間 約1時間20分

距離 約3.5km

〈豊田市〉夏焼　今も昔も道行く人々を見守るお地蔵さん

稲武の中心地を抜けて瑞龍寺を通り、夏焼城ヶ山へ。5つの登山口の内、夏焼の登山口からほぼ国道153号線に沿って麓をなぞるように野入へとつながる山道が旧街道にあたる。「登り下り一里余」の峠は地蔵峠の名前の通り、今も地蔵たちが並ぶ。城ヶ山の山頂からは稲武の町並みはもとより、天候に恵まれれば恵那山、白山、御嶽山などのパノラマが迎えてくれるので、途中、街道を逸れて登山道から山頂を目指すのも良いだろう。

①柵の扉は自分で開けて入る。必ず閉めること。　②山中の道には所々に案内板が立つ。③ 国道を走る車を見守る。④ 地蔵峠は、明治時代の改修工事で7m程掘り下げられたという。国道153号の道路際に登り降り口がある。

④地蔵峠登り降り口

③地蔵峠（地蔵・馬頭観音）

②道案内板

①イノシシ除けの柵

←山中の旧道／杉の木立が旧街道沿いにシンメトリーに並ぶ。

information

問 いなぶ観光協会
☎ 0565-83-3200
所 豊田市武節町針原4-1

◎「夏焼城ヶ山：飯田街道ルート」にはトイレがありません。また季節によっては害獣、害虫対策を考慮してください。

どんぐりバス 上夏焼 —徒歩5分→ ① イノシシ除けの柵 —徒歩20分→ ② 道案内板 —徒歩20分→ ③ 地蔵峠（地蔵・馬頭観音） —徒歩1分→ ④ 地蔵峠登り降り口 —徒歩2分→ どんぐりバス 上野入

所要時間 約48分

距離 約2.2km～2.5km

尾張・三河の塩の道

日本ではかつて、塩を海水から作っていた。それゆえ、塩は山の民にとって貴重なものであり、海岸部と山間部は塩の道で結ばれていた。愛知県でも古くから三河湾や知多半島の沿岸部で塩が作られ、伊那谷、木曽谷を通り、信州の塩尻まで運ばれていた。川船で川を上り、馬の背で奥地へと。人々の暮らしを支える塩の道は、さまざまな文化を伝える道でもあった。

◆近世の尾張と三河の塩生産

江戸初期には尾張の星崎（名古屋市南区）、常滑（常滑市）、乙川・成岩（半田市）、三河の大浜・棚尾（碧南市）、吉良（西尾市）を中心とした幡豆郡から宝飯郡沿岸部（蒲郡市）で、塩が盛んに作られていた。

しかし、江戸中期以降、瀬戸内の塩が全国に広がると、尾張の塩田は次第に縮小した。一方、品質の高さで饗庭塩として知られた吉良や、平坂街道に面した宝飯郡の塩田は生産を拡大。三河湾沿岸の製塩は、江戸後期から明治初期に最盛期を迎えた。

＊明治38年の国による塩の専売制以後、愛知県内の塩田は縮小され、昭和47年、新たな製塩技術の導入により国内の塩田は全て廃止された

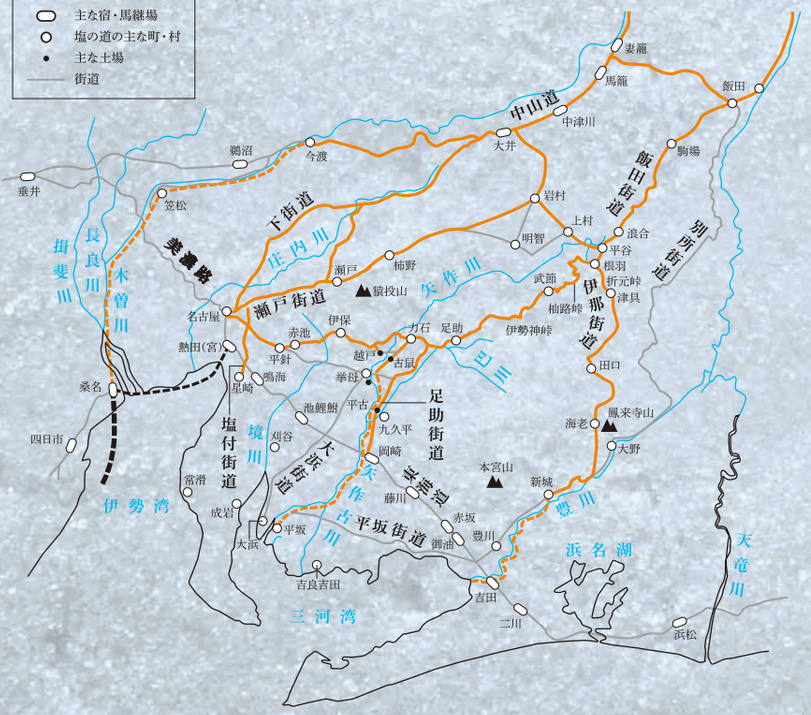
◆海から山へと、幾本もの塩の道

三河湾岸の塩や瀬戸内塩は廻船で矢作川河口の平坂湊に回漕され、川船に積換えられて第二の中継地、岡崎へ送られた。岡崎には塩の仕入れや、販売を独占した塩座があり、矢作川を上るすべての塩が納められていた。

塩は、岡崎から第三の中継点、足助に運ばれた。岡崎からは足助街道で運ぶルートのほかに、矢作川水運で移送するルートも利用された。矢作川やその支流には荷揚げを行う土場が複数造られ、矢作川上流部の古鼠、越戸土場（豊田市）、巴川の平古土場（豊田市）はにぎわった。塩は、土場で陸揚げされ足助に向かった。足助には、飯田街道で運ばれた塩も集まり、塩問屋で七貫目（約26kg）に統一され、新しい俵に詰め直し奥地へ運ばれた。これを足助塩と呼んだ。

足助塩は、飯田街道の伊勢神峠や杣路峠を越えて信州の根羽へ。根羽には吉田湊（豊橋市）で川船に積換えられた塩も豊川を上り、新城から伊那街道を北上、折元峠を越えて運ばれていた。さらに塩は、根羽から街道を北上し、飯田、伊那谷方面に運ばれた。塩尻は日本海からの塩の終着といわれている。

尾張から信州木曽谷へ向かう塩の道もあった。桑名から木曽川を上り、今渡で荷揚げし、中山道を大井、中津川、さらに木曽谷方面へ至った。運搬には尾張藩の鑑札を持つ尾州岡船と呼ばれた牛方が大きな力を持っていた。しかし、江戸幕府の五街道だった中山道は規制が厳しく、物資の運搬は敬遠された。尾張からは、下街道のルートや、瀬戸街道（品野街道）のルートが多く利用されていた。

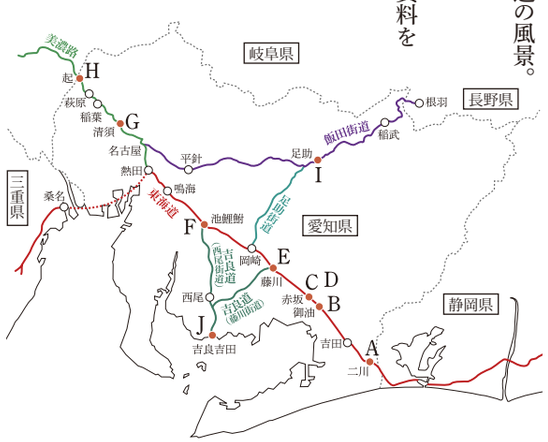


＊地図は、豊田市郷土資料館『塩の歴史と民俗』展図録を参考に作図

＊街道の名称や経路は、時代によって変化しましたが、上記地図のルートは、江戸と明治の二つの時代を含めた〈塩の道〉の概略図で、歴史学術的には正しくはありません。また文中、地図内の「飯田街道」は、江戸時代には「伊那街道」と呼ばれていましたが、吉田～新城を北上した伊那街道と区別するため、あえて「飯田街道」としてあります。飯田街道としたため、江戸期、七里街道と呼ばれた道は、足助街道としてあります。

愛知の街道資料館を訪ねる

参勤交代の大名たちが宿泊した本陣のしつらえや、
馬の背に荷物を積んで街道を行き来した
中馬たちの道具類。
そして歌川広重の描いた旅人たちと街道の風景。
愛知にはかつての宿場町の様子や
旅人たちの息づかいを今に伝える歴史資料を
展示する資料館が各地に点在する。
歴史を知れば街道旅も一味違う。
江戸の旅模様に思いをはせて、
〝街道資料館〟に出かけよう。



営 営業時間
¥ 入場料金
休 休館日案内
住 住所
P 駐車場の有無（台数）
問 問い合わせ先施設
☎ 電話番号

A 東海道で唯一の大名と庶民の宿を見学
豊橋市二川宿本陣資料館

※施設リニューアルのため、下記の期間は全面休館しています。
令和6年1月9日(火)～11月2日(土)

東海道で2か所のみ現存する本陣の遺構と、旅籠屋「清明屋」が一般公開されている。本陣と旅籠が同時に見学できる施設は全国でここだけ。身分の違いによる宿泊設備の相違などが比較できる。また併設された資料館では二川宿、本陣、東海道というテーマで江戸の旅や二川宿をわかりやすく紹介している。企画展も実施されている。

営 9:00～17:00（入館は16:30まで） ¥ 一般400円 小・中・高校生100円 休 月曜日（ただし、この日が祝日または振替休日の場合はその翌日）、年末年始（12/29～1/1）
住 〒441-3155 豊橋市二川町字中町65 P 無料（100台） 問 豊橋市二川宿本陣資料館 ☎ 0532-41-8580

B 御油宿、松並木の歴史と歌川広重の版画
御油の松並木資料館

江戸時代の御油宿の街並みの復元模型や、浮世絵版画、旅装束など資料130点を展示。版画は、歌川広重以外にも御油宿を描いたものを多く集めて展示しており、見比べることができておもしろい。入り口には松の切株もある。

営 10:00～16:00（12:30～13:30は休館） ¥ 無料
休 月曜日（祝日の場合は開館 ※翌日も開館）、年末年始（12/29～1/3）
住 〒441-0299 豊川市御油町美世賜183 P 無料駐車場あり
問 御油の松並木資料館 ☎ 0533-88-5120

C 江戸時代の貴重な旅籠建物を間近で見学
豊川市大橋屋（旧旅籠鯉屋）

江戸時代の建物のまま、平成27年（2015）まで営業を続けていた旅籠建物。以前は、宿泊客以外は外観の見学しかできなかったが、保存工事を経て内部も一般公開。格子越しに東海道を見下ろせる座敷や日本古来の建築様式に触れられる。

営 10:00～16:00 ¥ 無料
休 月曜日（祝日の場合は開館）、年末年始（12/29～1/3）
住 〒441-0202 豊川市赤坂町紅里127-1 P 無料駐車場あり
問 豊川市大橋屋（旧旅籠鯉屋） ☎ 0533-56-2677

D 江戸時代の赤坂宿の資料を展示
赤坂宿場資料室（豊川市音羽生涯学習センター内）

赤坂宿の歴史、赤坂宿を題材とした浮世絵、高札や駕籠などの資料のほか、豊川市音羽地区の歴史や文化、宮路山など自然を紹介（※見学をご希望の方は、生涯学習センター1階事務所にお申し出ください）

営 9:00～17:00（見学希望の方は1階事務室にて申込）
¥ 無料 休 月曜日、年末年始
住 〒441-0202 豊川市赤坂町西裏47-1 P 無料
問 豊川市音羽生涯学習センター ☎ 0533-80-1357

E 門構え、高札、民具など貴重な資料が充実
藤川宿資料館

脇本陣跡に建てられた歴史資料館。門構えは江戸時代のもの。藤川宿の街並みを500分の1に縮めたジオラマや、岡崎市指定文化財の高札、旧本陣文書、古民具などの多彩な宿場資料が約60点ほど展示されている。

営 9:00～17:00 ¥ 無料 休 月曜日、年末年始（12/29～1/3）
住 〒444-3523 岡崎市藤川町字中町北6-1
P 資料館東側、道の駅藤川宿（195台）
問 岡崎市教育委員会社会教育課 ☎ 0564-23-6177

F 実物大の旅籠屋で江戸へタイムトラベル
知立市歴史民俗資料館

東海道の歴史を学ぶ資料も充実。常設展の「池鯉鮒宿コーナー」では絵図やジオラマ、浮世絵、旅道具などを展示。中でも入口から帳場までがリアルに復元された旅籠屋（駒屋）は必見。江戸時代の旅人気分を味わえる。

営 9:00～17:00 ¥ 無料
休 月曜日（祝日の場合は開館）、第4金曜日（その日が祝日の場合は、その前日）、
年末年始（12/29～1/3）、特別整理期間 住 〒472-0053 知立市南新地2-3-3
P 無料駐車場あり 問 知立市歴史民俗資料館 ☎ 0566-83-1133

G 市場の様子や問屋の暮らしを今に伝える
西枇杷島問屋記念館

明治初期に建てられた旧山田九左衛門家の住居を移築復元。住居と商用部分を持った典型的な問屋構造になっている。江戸から明治時代にかけての下小田井の市の様子や野菜問屋にまつわる資料、当時の暮らしを伝える展示が並ぶ。

営 10:00～16:00（入館は15:30まで） ¥ 無料
休 月曜日、祝日の翌平日（月曜日、祝日の翌平日が休日の場合は近日の開館日）、年末年始（12/29～1/3）
住 〒452-0045 清須市西枇杷島町西六軒20 P なし 問 清須市教育委員会生涯学習課
☎ 052-400-2911（代表）

H 美濃路、起宿の歴史を模型や旧建築で体感
一宮市尾西歴史民俗資料館

常設展示室では美濃路起宿の歩みと近代以降の街の移り変わりを展示。隣接する旧林家住宅は脇本陣林家の邸宅。1階と庭園を公開している。資料館が作成した「歴史街道美濃路を歩く」は美濃路の情報をまとめた街道散策の必需品（資料館にて販売）。

営 9:00～17:00（入館は16:30まで） ¥ 無料
休 月曜日（祝日の場合は翌日）、祝日の翌日（土日祝の場合は開館）、年末年始
住 〒494-0006 一宮市起字下町211 P 無料駐車場あり 問 一宮市尾西歴史民俗資料館
☎ 0586-62-9711

I 切妻（きりつま）平入の貴重な銀行建築
足助中馬館

大正元年（1912）に建てられた旧稲橋銀行足助支店社屋を利用した資料館。商業、金融、飯田街道の交通、足助の町並み、馬具や塩を量った升や秤など塩の道らしい資料も展示。愛知県有形文化財指定の建物も見どころ。

営 9:00～17:00 ¥ 無料
休 木曜日（11月および祝日は開館）、年末年始（12/28～1/4）
住 〒444-2424 豊田市足助町田町11 P なし
問 足助中馬館 ☎ 0565-62-0878

J 岡崎、足助、信州に向かった饗庭（あえば）塩の歴史
西尾市塩田体験館 吉良饗庭塩の里

岡崎、足助を経て遠く信州伊那谷まで中馬の背に載せて運ばれた饗庭塩は、苦汁分が少ない良質な塩だった。饗庭塩の里は昔ながらの塩田にて塩づくりを体験できる珍しい施設。館内では、入浜式塩田や吉良上野介義央公の系譜など関係資料も展示。

営 9:00～17:00（塩焼き体験の受付は16:30まで）
¥ 入館無料（塩焼き体験 200円/塩田体験（要予約）一般500円（高校生以上）、小中300円）
休 月曜日（祝日の場合は開館）、年末年始（12/29～1/3） 住 〒444-0514 西尾市吉良町
白浜新田宮前59-1 P 無料駐車場あり 問 吉良饗庭塩の里 ☎ 0563-32-3373

時を旅する

愛知の街道

2024年6月発行
発行：あいちの歴史観光推進協議会

主要参考文献

『愛知県歴史の道調査報告書』　愛知県教育委員会
『愛知の歴史街道』　中根洋治　愛知古道研究会
『東海道・中山道 旅と暮らし』　新田時也・志田威・中澤麻衣　静岡新聞社
『図説　三河の街道と宿場』　大林淳男・日下英之監修　郷土出版社
『日本交通史』　児玉幸多編　吉川弘文館
『尾張の街道と村』　櫻井芳昭　自費出版
『美濃路』　日下英之　愛知県郷土史刊行会
『なごやの古道・街道を歩く』　池田誠一　風媒社
『なごやの鎌倉街道をさがす』　池田誠一　風媒社
『東海の街道1　街道今昔　美濃路をゆく』　日下英之監修　風媒社
『街道を歩く　飯田街道・伊那街道・姫街道』　前田典子　春夏秋冬叢書
『寄道道草　東海道』　宮本真理子　春夏秋冬叢書
『中世の東海道をゆく』　榎原雅治　中公新書
『歩いて旅する東海道』ウエスト・パブリッシング　山と渓谷社
『ちゃんと歩ける東海道　西　袋井宿～京三条大橋』　五街道ウォーク・八木牧夫　山と渓谷社
『シリーズ・城郭研究の新展開３三河岡崎城 家康が誕生した東海の名城』愛知中世城郭研究会編 戎光祥出版
『日本歴史地名体系２３　愛知県の地名』　平凡社
豊田市郷土資料館特別展『塩の歴史と民俗-三河の塩生産と交易-』図録　豊田市郷土資料館
『美濃路　散策ルートマップ』　一宮市尾西歴史民俗資料館
新修名古屋市史報告書４　『江戸期なごやアトラス』　名古屋市総務局
『景観まちづくりガイドブック０１藤川』、『景観まちづくりガイドブック０２ 本宿』
岡崎市都市整備部まちづくりデザイン課
名古屋市熱田区役所、昭和区役所、千種区役所、西区役所、緑区役所、南区役所
各ホームページ「史跡散策路」

＊本ガイドブックのデータは、２０２４年６月時点のものです。

清須宿本陣跡（清須市）

愛知県全域地図

使用画像について
●表紙画像（上から下に順に）：有松の町並み（名古屋市）、伊勢神峠（豊田市）、宮の渡し公園（名古屋市）、起宿脇本陣跡（旧林家住宅）（一宮市）、豊橋市二川宿本陣資料館（豊橋市）／
浮世絵　歌川広重「東海道五拾三次内 鳴海」「同 宮」「同 岡崎」「同 二川」画像一部（静岡市東海道広重美術館蔵）
●裏表紙：御油のマツ並木（豊川市）